
家庭教師ヒットマンREBORN!

Let`s **傍観者!**

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！

Let's

傍観者！

【Nコード】

N7499V

【作者名】

真菜

【あらすじ】

リボン大好きな男子系少女、霜月要は信号無視のトラックに轢かれて死んでしまう。そこに現れた神様を名乗る少年、銀。彼は死んだのは自分の責任だという。お詫びとして要はリボンの世界に転生することに。そこで傍観Lifeを決め込んだ要だが。

傍観するその前に 登場人物紹介

霜月 要

性別：女の子

身長：158cm

髪：緑、エメラルドグリーンだよ

ショートカット、ヒバリサンと同じくらいカナ

瞳：澄み切った緑

一人称：オレ

性格：表裏が激しい(?)

結構厳しいけど、心を許すとことん甘える。

女の子らしい物が大嫌い。どっちかって言うと男の子っぽく振舞う。

好きな人間：偽善者とぶりっ子以外

嫌いな人間：偽善者とぶりっ子

好きなアニメ：そりゃあREBORNじゃね？

銀（神様）

性別：男の子

身長：167CM（羨ましいよ〜）

年齢：本人曰く、大体明治時代あたりから生きてんじゃね？

デモでも、見た目は15歳

髪：白銀（星みたい）

ブーチの市丸ギンみたいな？

瞳：深紅

一人称：オレ

性格：ちよ〜つと強気な部分あり、弱い部分あり

好きな人間：一応神様だし、人間皆好きだぜ

嫌いな人間：モチベーションのために、いない

村上 和泉

性別：女の子

身長：166CM

髪：ふんわりとしたピンク色の短めのポニーテール

瞳：ガラスのような澄んだ水色

一人称：私

性格：自分がすっごく可愛いと思っている

ある意味ぶりっ子、自覚なし

好きな人間：みくんな大好き

嫌いな人間：いませんよっ

好きなアニメ：やっぱりREBORN
でしょ

1、 神様と転生

ちつす。オレは霜月要。今は中学生で西条考古学院って言うレベルの高い学校に通っている。レベルが高いから、制服は存在しない。存在しないから男子の服を着ている。だって、女子は嫌いだから。

オレは正真正銘の女子だが、何故か女子の物が嫌い。

親はオレがガキの頃に、強盗殺人にあつて死んでいる。それ以来ずっと一人で過ごしてきた。そう、ずっと一人で。

普通ではありえないエメラルドグリーンの髪、同じように緑色の澄んだ瞳。人々はオレを見るとよく言った。「まるで氷のようだ」と。別にハーフな訳じゃない。生まれつき。

そんなオレは今日も一人で学校から家に向かって歩いていく。

車通りの多い交差点。いつにも増して、車は走っていた。信号が青になるのを待ち、横断歩道を渡る。いつもと何も変わらない。変わらない筈だった。この時までには。

キイイイッ

耳をつんざくようなブレーキ音が響く。目の前まで大型トラックが迫っていた。そこから逃げることもなんて造作もない。でも、体が動かなかった。

ドスンという鈍い衝撃。オレはそのまま吹き飛ばされた。

「人が轢かれたぞ！」

「急いで救急車を！」

いろんな怒号が飛び交う。何言ってるんだよ、オレは全然平気だ。：

…と思ったけど平気じゃない。指一本動かせない。何でだよ。

動かない指に生温い何かが触れた。ぼやけていく視界に赤い何かが見えた。これはオレの血？ってことは、オレは死ぬのか。父さんと母さんの許に逝けるのか。

どうせ死ぬのならそれでいい。ああ……眠い。とりあえず今は、眠らせてくれ。

『おい、起きろ。起きろ要!』

誰かが呼んでいる。でも、さっきも言ったろ? オレは眠いんだ。寝かせてくれたっていいだろ?

「起きろって言ってんだよ!」

バシイイン

「痛えっ! 何しやがる!」

頭をはたかれ、思わず飛び起きた。あれ? 体が動く。動くなら丁度いい。オレをはたいたヤツをじっくり見る。

白銀の髪に深紅の目。なんだか神秘的なオーラを放っていた。

「誰?」

「オレは銀。お前たちの言う神様だ」

「家に帰れイタイ子」

「オレはイタイ子じゃねえ!」

嘘をつくな。十五歳くらいにしか見えねえ奴が、神とかほざいたらイタイ子以外に何がある！そもそも、ここは一体どこだ？一面真っ白、その中にオレと自称神様がいた。

「ここは、人間界と天上界の狭間だ。REBORNが好きなお前なら分かるだろう」

「だから？」

「お前は死んだんだ」

「いや、知ってるし」

「だからお前を転生させる」

神様の割には物事の順序という物が分からないらしいな。突然転生とか言われて理解が出来るわけがねえだろ。まずは、何でこうなったのかを教えろってんだ。

「お前が転生する理由、それはお前が死んだのはオレの手違いだったからだ」

手違い？そんな物で人が殺せるなんて、神様って酷いね。

「だからお前をREBORNの世界に転生してやる」

「……………」

「なんだ、喜ばないのか？」

「確かにここは喜んで然るべきだろう。だが、そう簡単に信じると
思うか？」

転生なんて嘘くせえ。それ以前にオレはまだ、お前を神だとは認め
ちやいねえ。俺が納得することが出来たら神と認め、転生だってし
てやる。

「それなら、転生できたら神だと認めてくれるんだな？」

意味ありげな言葉。

「今すぐ転生してやる。他の事は手紙で伝える。いいな」

「ちよっ待てよ！まだ転生を了承した訳じゃ……………」

直後に俺の体が光に包まれる。

「じゃあな」

「おおおおおいつ!!!!」

意識は一旦そこで途切れた。

ドスン

「いつつ……」

軽い衝撃と共に、オレはどこかに辿り着いた。どうやらどこかの部屋らしい。

モノクロタイプで統一された部屋。壁紙もカーテンも家具も全てモノクロ。やけに落ち着くなこの部屋。

部屋のテーブルの上に置かれた一枚の封筒。宛名は“銀より”と記されていた。銀……ってあの神様か。そういえば、他の事は手紙で伝えるって言うってたっけ。

『おっす。この手紙を読んでもってことは、しっかりとそっちの世界に着いたんだな。これでオレを神だと認めてくれたか？』

まずは、お前自身のことについて話す。お前はこれから並盛中学に通ってもらおう。制服は男子のを用意してある。お前が女子物が嫌いって事は知ってるからな。安心しろ、ちゃんと許可は取ってある。

次に、部屋においてあるダンボールの中身についてだ。並中の生徒手帳、制服、お前が心底大事にしていたチョーカー、それとブレ

スレットだ。ブレスレットに関してはオレからの贈り物だ。ありがたく受け取れ。

何か聞きたいことがあれば、俺に会いたいと思いつつ寝ろ。そうすればいつでも会えるぜ。

それとだ、その世界でのお前の行動は自由だ。原作に関与してもよし、ぶっ壊してもよし、関与しなくてもよしだ。それじゃ、せいぜい頑張って生きろよ。

銀より』

「んだコイツ、生意気」

まずは持ち物確認だな。ダンボールは……あつた。

中には手紙に書いてあつたものが入っていた。一番気になるのはこのブレスレット。何の説明もないから何の意味があるのか分からない。

とりあえず着けてみる。瞬間、オレの前に現れた謎の画面。なんだこれ？よく見ると、テレビ画面だった。意味ねーっ！普通にテレビで見ればいいだろ！

どうでもいいもんが入ってたな。そう思いながらチョーカーを取り出す。手放すことのできない思い出の品。オレの唯一無二の友達にくれた物。何年か前に死んじゃったけどな。

箱の中身を確認し終わると、オレはベッドに潜り込んだ。どうせなら、明日は早く並中に行きたい。その為にオレはベッドに入って二秒で眠りについた。

2、Let's 並盛中

「くあ」

朝一番の伸び。たまに足が攣ることがある。けど今回は攣らなかった。そのほうが嬉しい。なぜなら一度攣ると、最低十分は悶絶しているからだ。

軽く朝食を済ませ、制服に着がえる。現在は7:03。丁度いい頃合だな。さて、行くとするか。これから始まるオレの新しい人生に。

並中に着くと、門は開いていた。現在7：06。さつきから殆ど時間経ってない。何故か、オレの家は並中と五〇〇mしか離れていないからだ。

まずは、職員室。

「失礼します」

ノックをして入る。さてと、オレの担任は誰かな。キョロキョロしていると声をかけられた。

「君、霜月要さんかな？」

「はあ……」

「霜月さんの担任をします、新島といいます」

新島、この先生は原作では名前の出てこない勝手な先生だ。別に先生の名前とか興味ないし。根津以外は。

「霜月さんは1 - Aです。教室は分かりますか？」

「ええ、たぶん」

「それでは、朝のH・Rは8：10からですので、それまで自由に校内を見て回ってもいいですよ」

「分かりました」

それなら屋上に行こう。ヒバリさんがいるかどうかは知らないけど、構わない。西条考古学院は屋上は立ち入り禁止だったから、初めての屋上だ。行かないわけがない。

案外、迷わずに屋上に辿り着いた。扉を開けた瞬間に吹き抜ける、気持ちのいい風。これだよ、これを堪能したかったんだよオレは。フェンスから下を見下ろす。ゾロゾロと生徒たちが登校してくる様子がよく見える。ツナの姿は見当たらない。獄寺も然り。山本は野球のユニフォームを着て走っていた。きっと朝練なんだろう。

それにしても、一体今は原作のどこに位置するのだろうか。ツナがパンツードで走ってくる気配なし、獄寺が「10代目！」と言いなから走ってくる気配もなし。もしかしたら、原作に入る前なのかな。

しばらくそうしていると、チャイムが聞こえた。完全着席のチャイム、要するにH・Rの予鈴。折角早く着たのに遅刻なんて笑えないオチは避けたい。名残惜しいが、オレは屋上を後にした。

「今日は皆さんも知っている通り転校生が来ます。では、霜月さん、入ってください」

「どうも、霜月要です。男子の制服を着ていますが、これでも女子です。友達になるのは構わないが、キャピキャピ系の女子は近づかないで欲しい。以上だ」

「それと霜月さん、他にも転校生がいるので紹介しておきますね。
獄寺君、村上さん」

なる。オレは獄寺と同タイミングで来たんだな。それより気になるのは村上って奴。

「初めまして。村上和泉って言います。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げるソイツ。コイツには関らないほうがいい、オレの直感がそう告げた。何で原作にいない変な奴がいるんだよ。

「霜月さんの席は、窓際の一番後ろです」

「へーい」

原作キャラとは離れた席。こいつ等とも距離を置こう。原作が傍観できなくなるからな。それにしても一番後ろはラッキーだぜ。寝てもバレねーからな。

「つー訳で、話を聞こうじゃないか銀」

「はい、えーと……そのお」

「グチグチしてないで、さっさと話せやコリア」

「あいつは、オレがREBORNの世界に送った奴なんだ」

「へえ〜。それで」

「和泉はオレを特殊な形で召喚した。オレは奴の願いを2つ聞かなければならなかった」

「ふんふん。で？」

「一つ目がREBORNの世界に転生すること。もう一つが自分に特殊能力をつけること。オレはひ弱な女が何すんのか興味がわいたんだ。だから、願いを聞き入れた」

「なるほどねえ。で、何か言うことは？」

要から果てしなくキツイ殺気が放出される。

「すみませんでしたっ」

「もう一つ聞きたいことがあるんだけど」

「はいっっ」

殺気に怯えつつ、銀は土下座したまま要を見る。その表情は、笑っていた。目以外は。

「あのブレスレットは何かなあ？」

「あっアレは……えーっとすみません」

ボグウツ

要のパンチが銀の顔面にめり込む。

「何が“すみません”なのかしつかり説明してくれるかな？」

「アレは俺が作った奴で、特殊機能を搭載する予定だったんだが」

「“だが”？」

「間違つて未完成の物を送っちゃって」

ドガッ

今度は蹴りが鳩尾に入っていった。

「未完成を送っちゃったんだア。そうなんだア」

ニコニコと笑う要。だが銀にはそれが何を示すかよく分かっていた。要が右手でグーを作り、再び顔面めがけて振ろうとしたとき、

キンコーンカーンコーン

「かつ要！授業終わったぜ！戻ないとやばいんじゃないのか！」

「チツ。とにかくこれは返すからちゃんと完成品を持ってくるように」

「はい……………」

既に反抗する勇気を奪われた銀であった。

3、初めての原作傍観

やっぱし屋上はいいな！え？何で屋上にいるのかって？そりゃまあ、

『死ぬ気で消火活動！！！！』

アレを見ているからだ。そう、ツナVS獄寺を傍観中だ。最初っから見ているがアレだな。うん、死ぬ気のツナは目に悪い。だってパンツ一丁だぜ？京子なんてよく耐えられたと思うよ。

傍観中に気づいたことが一つ。何故かその場にいるのが一名多い。その一名はまあ言わなくても分かるだろうが、もう一人の転生者村上和泉。ツナと獄寺の戦いを、リボーンの横で楽しそうに見ている。あいつは何のためにこの世界に来たんだ？

23

『はあ、何とか助かった~~~~』

『御見逸れしました！！！！あなたこそボスに相応しい！！！！』

おうおう、やってるなあ。村上がいること以外は全部原作通り。何の問題もなさそうだ。と、思っていたら今だけだった。次の獄寺の台詞からずれが生じていた。

『和泉さん、オレと手合わせ願えないでしょうか！！』

思わず飲んでるジューズを吹き出すところだった。おいおい、どうした獄寺。あいつに手合わせ頼んでるし……、しかも和泉“さん”かよ。何があっただんだ？

『いいの、獄寺君？手合わせの相手が私なんかで』

『和泉さんは腕の立つ人だと聞いています。どうかお願いします』

裏社会の情報も操作してあんのかよ。腕の立つ人って、あいつ強いのか？だったらヒバリさんと戦えっての。

『それで俺が勝ったら、10代目の右腕と認めてください!!』

流石に今度は吹き出した。この勢いじゃ原作ぶっ壊しじゃねえか。もしかして原作を壊しに来たのか？

『うん、分かった。でも、勝たなくてもいいよ。私に一撃でも当てられたら合格にしてあげる』

『ありがとうございます!』

『それじゃ、明日にでも並盛山でな』

『はい！』

ダメだこりゃ。もし（まあ、無いだろうが）獄寺が負けた場合、ツナノ右腕はいなくなる。そうなると、この先のストーリーに大きく支障が出る。やばいんじゃないかねえか？

あ、意外と面白いかもな。世界が変わり行くところを、オレは只じつと傍観する。それでいいじゃないか。

と、その時後ろから殺気を感じた。でも驚きはしない。誰だか想像がつくから。

クルリと後ろを向き、しっかりと相對する。

「こんにちは、初めまして。ヒバリさん」

「君、転校生の霜月要だね。ここで何してるの？」

「何って、涼を求めてここにいるだけです。何か問題でも？」

「そう。今から僕ここで寝るから出て行ってくれない？」

生意気〜っ！別に居るぐらいいいじゃないか。と思っただけでも顔には出さないポーカーフェイス。それに事は起こさない。ヒバリさんだって、いざれ原作に關係する存在。変に興味をもたれちゃ、傍観に支障が出る。

だから、ひとまず退散。

「それじゃあ今度暇なときにゆっくりとお話しましょう、ヒバリさん」

そう残し、屋上を出る。

何が“ゆっくりお話ししましょう”だ！ヒバリさんとは関らないって決め込んだばかりだろうが！！嫌だからな！風紀委員に入れられて、雑用に使われるのは断じて許さんからな！！

4、初っぱらからの原作にない出来事

場所は並盛山。あいつはそう言っていた。もし原作が変わってしま
うのなら、しかとこの目で見届ける。それがオレのポリシー。それ
じゃあ、行くとするか。

「その前に、コイツを届けに来たぜ」

突然部屋に出る白い霧。何かと思ったら、それが晴れるとそこには
銀がいた。

「随分と神様つぼく出てきやがって」

「だって神様だし」

「で、“コイツ”って何だ？」

「このことだ」

銀が出したのは、見覚えのあるプレスレット。完成品ができたから
届けに来たんだと。何で今なんだよ！

「並盛山に行くなら使えろと思っぞ」

「何で？」

「言ったたる。このブレスレットには特殊機能が搭載されてるってな」

そういえば言ってたな。と言うわけで腕につけてみる。今度は何も出てこなかった。と言うかこの前のヤツより少しばかり重かった。

「使い方は自然と分かる、そういう仕組みだ。お前が何か能力を必要としたときに、それに応じて使えるようになってる。ま、できないこともあるぞ。例えば、何かを作り出したりって言うのはNGだ。やっていいのは大神様だけなんだ」

「大神様って誰だ？」

俺が聞くと、とたんにしまったと言う顔をする銀。

「とにかくだ。何かを作り出すな、それだけは守れ。いいな！」

「おいちょっと待てよ！」

止める間もなく、来たときと同じように白い霧により銀は消えた。逃げんなよおおお！！

……ま、いつか。とにかく急がなきゃバトルが始まっちゃう

まう！如何にか全員が揃う前に並盛山に着かないと。

遅かった。既に戦闘は始まっていた。並盛山についたとき、上のほうから爆発音が聞こえていた。蓄生
っ！！！！銀のせいだ！！

猛ダツシユで山道を駆け上がる。その時ふと気がついた。あれ？体が軽い。息が切れない。……………銀クン後でお話があります。絶対に逃げないように。

走りながらブレスレットを操作して、オレの気配を100%消し去った。本当に消えたかなんて知らん！！

走り始めて5分。ツナの姿が見えた。おっしゃーっ！やっと着いたーっ！気配が消えているはずだから、ツナのいる近くの木にもたれ掛かり戦闘を見ることにした。

俺が見ることは三つ。

一つは、戦闘力。獄寺に戦いを挑まれてそれを受けると言うことは、戦闘力に自身があると言うことだろうが、本当に強いかどうかを見る必要がある。

一つは、武器。今オレは銀に頼んでオレ専用の武器を作ってもらおうと思っっている。護身用にだけ？それで、あのクソ女とかぶったら嫌だからこの機会に確認しておく。

一つは、戦闘スタイル。これも何割かは、さっきと同じ理由。他に言っておくと、あいつに戦闘でも申し込まれたとき（絶対に受けたくは無いが）、その攻撃を見切るのに使えるからだ。

奴の武器は、槍。片手で扱い高めに構えるその姿は、まるで舞を思わせるかのような動きを生み出す。風を巻き起こし、獄寺のボムを的確に防ぐ。あまりゴチャゴチャとは動くことは無く、かといって直立不動な訳でもない。

あいつ、できる。認めたくは無かったが、奴の戦闘に関する能力は、本物だ。

「獄寺あ、頑張れよ」

思わずぼやく。正直言っつて獄寺に勝つて欲しい。村上和泉、負けちまえ。

その時、一瞬だが村上和泉が何かに気を取られた。そんなチャンスを見逃す獄寺ではない。たった一瞬だが勝つのは申し分の無い一瞬。

獄寺のボムが、村上和泉を吹き飛ばした。

「やったぜ」

獄寺が勝鬨を上げる。ツナもそこに駆けていった。でもオレは、ここから動かない。なぜなら、あのクソ女に近づきたくないからだ。

そしてオレは、獄寺が右腕に認められる結果が見えていたから、並盛山を後にした。

だから、要はこのあとの会話を知らない。

「10代目、やりました」

「すごいよ獄寺君。この私を倒すなんて」

「いえ……和泉さんは御凄い方です。ほんの一瞬が命取りでした。一体どこを見ていらしたんですか？」

「うん？ちよつとね。」

それより、私を倒したんだから、約束通りに10代目の右腕として認めてあげるよ」

「ありがとうございます！！」

和泉は微笑み、獄寺は深く頭を下げ、ツナはほっとした様子でそれを見ていた。勿論リボーンは、

(ファミリーゲット)

としか、思っていない。

日は傾き始め、並盛山は闇に包まれ始めていた。そんな中和泉は、
帰らずに佇んでいた。

「霜月要。一体あそこで何をしていたの？」

彼女が見たのは、ツナの後ろの木にもたれ掛かり、自分たちの戦闘を観察する要の姿。ツナたちについてきたのか。いや、最初はいなかった。それなら何故……。

（昨日からおかしいと思っていた。どうして私以外に、原作にいない人が居るの？あいつは何者？）

彼女の疑問は誰に届くことなく、並盛山と一緒に闇に包まれていった。

4、初っぱらからの原作にない出来事（後書き）

すみません、訂正させてもらいました。

獄寺の台詞が「村上さん」から「和泉さん」に直されました。間違いに気づいていた人、ゴメンナサイ。

獄寺今までに一回も「村上さん」なんて言ってねえよおおっ!!

5、 退学クライシス

「川田」

「はい」

「栗原」

「はい」

うーっす。現在、退学クライシスのテスト返し中だぜ。根津には興味はあるが、この話自体には何の興味はねえ。だって、どうせ関わらないだろうし。

「沢田」

「はい」

お、ツナの番じゃねえか。楽しみだぜ、あの罵倒。ってかついでに村上和泉も罵倒しとけ。

「あくまで仮定の話だが……クラスで唯一20点台をとって、平均点を著しく下げた生徒がいるでしょう。エリートコースを歩んできた私が推測するに、そういう奴は学歴社会において足を引っ張るお荷物にしかならない。

そんなクズに生きている意味、あるのかねえ？」

勿論点数は、26点。あつはつは、流石はダメツナ君。こんな点数を取れるのは君しか居ないよ。ダメダメな意味でな。

「次、村上」

「はい」

そういえばあいつの学力ってどん位なんだ？

「あくまで仮定の話だが……」

「始まったよ……」

「クラスで平均的な80点台をとった、品行法制な生徒がいるでしょう。だがソイツはクラスの馬鹿とつるんでいる。なぜなら、そのバカに情が移っているからだ！」

……………絶句。意味わかんねーし。だからなんだよ、情が移るのはいけない事なのかよ……………ってオレが言うことじゃねえな。

「お言葉ですが先生、私はツナ君に情が移っているからつるんでい

るのではなく、いい人だと思うから一緒に居るだけです」

おうおう、いいこと言ってるじゃねーか、村上和泉。ちよつとも見直さねーけどな。

そんな時、教室の扉が音を立てて開いた。（遅刻魔の）獄寺が来たぜ。

「コラ遅刻だぞ！」

勿論キレル根津。さーて、ここからの獄寺の台詞が見物だぜ。なんとって、原作と違うことは明らかだからな。

「おはよーございます、10代目、和泉さん！！」

ざわつく教室。ムリもねーよな。どっからどう見ても不良の代名詞になりそうな獄寺が、自称できる生徒村上和泉と、ダメダメ生徒沢田綱吉に朝一番の挨拶。誰がどう見てもありえない光景。

「あくまで仮定の話だが、平気で遅刻してくる生徒が居るとしよう。そいつは間違いなく落ちこぼれのクズとつるんでいる。なぜなら類は友を呼ぶからな」

「おっさん、よく覚えとけ。10代目沢田さん及び和泉さんへの侮

辱はゆるさねえ!」

.....なんつーか、笑える。一人で大爆笑をしていたい
くらい笑える。

「せんせー、さっさとテスト返し、進めてー」

「あ...ああ。次、霜月」

「ういーっす」

普通に返してくれよ、頼むから。あ、でも点数よかったし、大丈夫
か。

「あくまで仮定の話だが」

やめろよ!! 冗談抜きでオレが何をしたって言うんだ!

「クラスで唯一満点を取り、クズの分の平均点を挙げた生徒が居る
としよう。そいつは他の奴とはつるんだりしない。なぜなら、天才
は一人を好むからだ」

ボグウツ

しまった、つい手が出ちまったぜ……。

「貴様ら全員退学だ

っ
」

職員室に根津の声が響き渡る。他の先生は何があったのかと興味を
持ってそちらを見ていた。

「落ち着きたまえ根津君」

「これが落ち着いていられるか！私に暴力を振るったのですぞ！！
連帯責任で沢田や村上ともども即刻退学にすべきだ！！」

今ここに居るのは、ツナ・獄寺・和泉・要の四人。根津の一言に思わず手が出てしまった要である。

「しかしですな、いきなり退学に決定するのは早計過ぎるかと……」

「……では猶予を与えればいいのですな」

「は？」

根津が出した提案、それは15年前にグラウンドに埋めたまま見つからないカプセルを掘り出せ、と言つもの。

「期限は今日中、できなければ……」

即退学だ!!!」

その時、要と和泉は思った。

(そんなもの無いのにな)

その後各自解散、カプセル探しに向かった。

「霜月さん、ちょっといい？」

「あん？」

「あなたの力、見せてもらおうわ」

そっぴい残し、和泉はグラウンドへと出て行った。勿論要はやる気
ゼロ。だって、どうせ埋まってるないんだし、地面真っ二つにするよ
うな力ねえし、と言うのが彼女の弁。

「ま、あいつの力でも見てるか」

逆に和泉を観察することにした。

「水天逆巻け

捻花」

いやいや、それはずるいだろ。あいつの槍って斬魂刀かよ。つーか
それ、海燕のдарろ！お前転生する世界間違ってるよ！
でもまあ、

ドガアアン

結果オーライ？無事、グラウンドは真つ二つ&根津のテストが出てきてめでたしめでたし。全員の退学を免れたとき。村上和泉い、お前は退学しろよお。

結局根津は学歴詐称で解任。ひゃっほー！

そうそう、原作では満点とった獄寺が、何故か90点だったぜ。

あ、そうだ。

「銀、短刀2本。よろしくな」

「……………了解です」

「霜月要。少し興味が沸いたよ」

6、 クラスメイトの自殺を阻止せよ！

並中の屋上　　そこで眠る一つの影。

　　要である。

要は自分の記憶を頼りに、ここである人物を待ち伏せていた。その人物は、あまり待つことなく現れた。

「……………霜月」

「よう山本」

そこに現れた山本は痛々しい物だった。右腕がギプスに固定され三角巾でつるされていた。誰が見ても何があつたのか分かる。

「骨折、か？」

「ああ。昨日練習しすぎちまってな。だから…」

「だから自殺しに来たのか？」

要の言葉に驚く山本。彼女の言うとおり、ここには自殺のために来たのだ。

「野球の神さんに見捨てられたってか？くっだらねえな」

要は起き上がり山本に歩み寄った。そして隣まで行くと、言った。

「オレは偽善者じゃねえから死ぬな、とは言わねえぜ。だけど、いくつか言わせてもらう」

「なんだよ」

「本当に神さんに見捨てられたときってのは、死んじまったときだぜ。それに比べりゃ骨折なんて軽いもんだろ」

軽く言う要に、山本は怒りを覚えた。

「骨折が軽いだと？んなモンお前に分かるわけ……」

「確かにわかんねーよ。けどな、骨折は死ぬのと違って治る。怪我が治れば野球だっていくらでもできんだろ？お前は自殺って行為で、自ら復活の可能性を消そうとしている。それは、神さんに見捨てられたんじゃなく」

「お前が神さんを捨ててるんだぜ？」

「つつ！！」

「神さんに見捨てられるか、それとも神さん突き放すか。お前が

考えることだ。考えて自分の道を開け。オレが言いたいのはそれだけだ」

じゃあな、と言い残し屋上を後にする要。教室に戻り、お楽しみイベントを見るために。その顔は何故かやりきった感に満ちていた。

一方取り残された山本は考えていた。

自分はどれくらい野球が好きなのか。自分は何のために今まで頑張ってきたのか。

それは自殺を聞きつけたツナたちが駆けつける頃には、決断が出ていた。

「山本！」

「悪いなみんな。自殺はしねえ、心配かけたな」

彼が出した決断、それは野球を続けること。そしてその為に生きること。要の言葉とともに深く心にしまわれた。

「後で、霜月にお礼言わねーとな」

「え？霜月さん？」

「みんなが来る前にあいつが居てさ、喝を入れられたんだ」

「そんなことが…」

こうして無事、山本の命は救われた。しかしこのとき誰も気づいていなかった。リボンが要に対し強大な興味を持ったこと、和泉が要に対し警戒心を強めたこと。そして、

「あれ、山本もツナも落ちてこないな」

物語が、原作と大きくずれようとしていることに。

7、雨・雲に気に入られる

やつほー。毎度おなじみ屋上だぜ。やつばいいよなー風は気持ちいいし、昼寝は邪魔されないし。いや、邪魔はされるか。勿論ヒバリさんに。

「やあ、また君かい？ここで何してるの？」

「屋上で昼寝しちゃダメなんですか？」

「ダメだよ。僕以外はね」

いつもの如く、理不尽な返答っスよ。

「じゃあ、どうすれば許してくれますか？」

「そうだね。僕との咬み殺し合いに勝つたら、許してもいいかな」

「お断りします」

ヒバリさんと咬み殺し合いなんて死んでもやるか。ってか、やったら死ぬだろ、オレ弱いし（多分な）

「それに君、その髪校則違反だよ。染めてるでしょ」

「これは地毛だ

っ！！染めてねえよ！！」

「あと、そのブレスレット。それも校則違反だよな」

「う……」

それは否定できないな。でもこれはずっと持ってるって銀に言われたし、オレ的にもなんか手放したくないカンジだし。

「そこを何とか……」

「だから僕との咬み殺し合い」

結局そうなるのか……。ヤダぜ？もしオレが勝って風紀委員に入れられたりでもしたら。いや、本音はメツチャ風紀委員に興味があるんだけどな。でも、雑用は嫌だぜ？

「君に拒否権は無いよ」

「は？………ってえええええっ！?!?!?強制スタートかよ！」

有無を言わず、トンファーをもって突っ込んでくるヒバリさん。待ってくれよ、まだ武器（護身用だけ）出来上がってねえんだよ
お……！

ええいつこうなればブレスだ！えとえと、脚力強化……………よし。
I can fly!!!!

地面を蹴り上げる。オレはそのまま宙返りをし、ヒバリさんの後ろに着地した。回避成功。

「へえ、君面白いね。咬み殺しがいがあるね」

「酷え！攻撃よけただけでそれかよ！」

「無駄口叩いてる暇はないよ」

再び走ってくるヒバリさん。この人すでにただの怖い人だよ！コンタクト映像出る！未来編で獄寺が使ってたようなヤツ！！

ブレスを操作すると、出たぜ。ターゲット 標的を固定、後はタイミングを合わせて……………。

「ていつ」

お腹に一発打ち込む。ゴメンねヒバリさん、でもパンチ力増量とかしていないから痛くないよ？

「!!!??」

ヒバリさんがその場に崩れ落ちる。あれ?なんかヤバイ?でもオレの元の力は全然強くないはずだから……。

「フツ」

「？」

「君、気に入ったよ。風紀委員に入らない？」

「お断りします」

「言い方を変えるよ。風紀委員に入れ」

「命令形かよ!!!」

やっべ、マジでこのオチになってるじゃねえか。どうするオレ!風紀委員に入るか、入らないか。

「じゃあ、条件付きでいいですよ」

「何？」

「オレは風紀委員に入る代わりに、無駄な雑用をオレに押し付けない。それが条件だ」

「やっぱり君は面白いね。いいよ、その条件呑んであげるよ」

こうして晴れて(？)風紀委員になったオレだった。何でこうなるんだろうな、原作キャラとは関らないって決めたのに。つか、山本を助けた時点で関ってるか。

その時、屋上の扉が開いた。

「お、いたいた。おっす、霜月」

「山本じゃねえか。何のようだ？」

「いや、お前に昨日の礼を言いたくてな。お前のおかげで自殺を踏みとどまれたんだ。ありがとな」

笑って言う山本。あ、そっか。オレがあんなこと言ったからコイツは飛び降りをしなかったのか。原作ブレイクだぜ。

「別にオレは何もしてねえ」

「だからさ、オレと友達になっくてくんね？」

……………何？オレと友達に???ふざけたこと言ってんじゃねえよ。

んな事したら、余計に原作ブレイクだろ。

「オレとお前はただのクラスメイトだ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

「お前って冷たいのな。見た目も性格も」

冷たい、オレを見たものは誰もが言う言葉。その言葉はオレの中にムカツキを生む。そんなオレに気づいたのが、山本は笑って続けた。

「そんなに怒るなつて。別に悪い意味じゃねえよ。なんつーか、お前さ自分に壁を作ってるみてーだったから、そんな気がしたんだ」

「オレが自分に壁を作ってるだど？」

「ああ」

そんなつもりはない。生まれつきこんな性格だから、前世でできた友達は一人。一人いただけでもましな方だな。

だからと言って、優しく接してくる山本と友達になろうなんて思いはしない。

「それでも、お前と友達にはならねーよ」

「そっか。んじゃ、オレの中では友達にしておくからな？」

「勝手にしろ」

「メルアド、交換しようぜ」

「勝手にし……は？」

メルアド交換？マジで？……まあ、それぐらいはやってもいいか。

「ほらよ」

ピツッと音が鳴る。交換完了のサインだ。オレは手早くケータイをポケットにしまうと、教室に向かった。

「授業が始まるぜ。オレは先に戻ってるからな、武」

「つつ！ー！」

ま、これくらいはしてやってもいいだろう。オレが原作に関らなければいい話なんだからな。

「霜月要か。面白そーな奴じゃねーか」

8、入ファミリー試験傍観！

ういっす。今日は山本の入ファミリー試験の日だぜ。

毎度の如くの屋上。オレはいつもの通りフェンスにもたれ掛かり、いつもの様に原作を傍観していた。原作って言っても、まだ獄寺と武のだんまりにらめっこだぜ？

話がそれた。いつもと同じはずなのにいつもとは違う。それは今オレが着ている学ランと腕章のせいだ。

今朝、インターホンがなる音で目が覚めたオレは、イライラしながら玄関に出た。来たのは宅急便。そして届いたのは、学ランと腕章。さらにヒバリさんからの手紙。

「やあ、荷物届いたかい？届いたなら今日からそれ、着てきなね。着てこなかったら咬み殺すから。」

それと、僕の電話番号とメールアドレス、登録するのも忘れないでね。君のはとっくに知ってるから。

最後に一つ。朝、5:00には学校に来ること。じゃあね。

雲雀恭

弥』

随分と理不尽なことが多い手紙だろ？

実行すんのは面倒だけど、ヒバリさんの相手をすんのも面倒だから
渋々従うことにした。おかげで今日一日みんなビビッてたぜ。

で、話を戻して入ファミリー試験なんだが、さっきから言葉の食
い違いが妙に気になる。よく耳を澄まして話を聞いてみよう。

『山本、お前ツナファミリーになる気はねえか？』

『ファミリー？なんだそりゃ？っていうか何でオレなんだ？』

『ゴメンね山本。なんか変に巻き込んだじゃって』

『何の話だかよくわかんねーけど、ツナが関係してんのか？』

『う…うん。まあね…』

『ま、オレも最近ツナに興味があったし、いーんじゃね？』

『え！？』

『なんか面白そーだしな。これで要の奴もいたらもっとおもしろー
んだけどな』

『え？霜月さん？』

(また霜月が出てきたな)

『霜月って奴はいねーが、ファミリーはおもしろーぞ』

『そうか？んじゃ、やってもいいぜ』

何でオレの名前を出すかな？リボンに興味をもたれたら一環の終
わりなんだよ。オレがいなくてもファミリーになれよ武。

近くで村上和泉が見ていることはさておき、入ファミリー試験が始
まった。

リポーンは、ナイフやらボウガンやらサブマシンガンやらをぶっ放し、何故か村上和泉も斬魂刀を始解させ、獄寺はボムを放つ。さらにランボが参上し、ミサイルランチャーをぶっ放した。

よくヒバリさん気づかないね。それとも気づいてるけど無視してんのかナ？いや、後者はありえないか。

そして無事、武はボンゴレファミリーの一員となった。めでたしだよな、その後のリポーンの一言がなければ。

「山本、後でその霜月要って奴、紹介しろ」

「ん？別にいいけどよ、要は会ってくんねーかもな」

「なんでだ？」

「あいつ、人間不信っぽいしな」

言い方ムカつくけど、サンキュー武！これでリポーンからの勧誘はなくなつて……

「それでも一回会ってみてーぞ」

なくなつて……

「んじゃ、要に後で聞いてみるぜ」

断れよーっ！リボンに目えっけられたら最後、何が何でもフアミ
リーに入れられんだろーがあっ！！

「銀」

「……はい」

「短刀2本、今日中に終わらせる」

「……了解です」

9、要、ボンゴレに勧誘される！

ピピピピピ

カチッ

「ふあ〜」

現在朝の4:30。寝ぼけ状態でベッドから降りる要。と、そこには銀がいた。

「要、武器できたぞ！」

すごくドヤ顔で言う銀。しかし、一秒後にはその顔に要の拳がめり込んだ。

「ぐはっ」

「銀。オレは昨日のうちに終わらせろと言っただけだぜ？何で今になっついてやる」

「いや、でも出来たのは昨日だったんだ！ただ夜中だったからお前が寝ていて……」

ボグウツ

「ぐはっ」

「そんなのが理由になるとでも？」

凍てつくような目で銀を見据える要。この視線に耐えられるものは
そういないだろう。

「できたならさっさと出せ」

「……はい……」

要は手渡された刀をじっくりみた。その様子を銀は静かに見守る。
もし要が気に入らなかった場合、どうなるかを予想しながら。

「パーフェクトだな」

「え？」

「後は……」

吹き抜ける

そつてんひりゅう
霜天氷龍！！」

瞬間、2本の短刀は柄に氷の竜が付いた、一対の短剣となった。

「ざっと、こんなもんだろ」

(お前、転生する世界間違ってるだろ)

思わず、要が和泉に突っ込んだ台詞と同じことを思った銀であった。要は、リポーンの世界で斬魂刀、随分とかみ合わない組み合わせであると思いつつも、やりたくて仕方がなかったのだ。

軽く振ると短剣は、元の短刀へと姿を戻した。

因みに言うておくと、これも全てブレスレットの力。

ピンポーン

「お客様が来たようだな。オレは帰るぜ。じゃあな」

「ああ」

銀はいつもの如く白い靄とともに消えていった。残された要は玄関のドアを開ける。

「やあ」

そこにいたのは、案の定、山本とリポーン。

「よつ。こんな早い時間に来ちまって悪いな。どうしても小僧が前に会いたいって言うからさ」

「ちやおっス。お前が霜月要だな。オレはリポーン、ツナの家^{かてき}家庭教師だ」

「知ってるぜ。いつも学校で沢田の近くに出没してる赤ん坊、お前だろ？」

「まあな。それより家に上がってもいいか？」

「何もねえぜ」

そう言いつつも、要はリポーンと山本を家に上げた。しかし、僅かにリポーンに殺気を放った。プロでなければ気づけないほどの、ごく微量の殺気。

勿論、一流の殺し屋である彼は気づいた。気づいていながら、わざと気づかない振りをした。

「それで、何のようだ？こんな朝早くに来やがって」

「お前、マフィアに興味はねーか？」

遠慮もせずに始めから本題のリボーン。

「マフィアか。全く興味ないよ、そんなくだらない物」

「なんだ、マフィアを知ってるのか」

「お前は知らない奴に聞いたのか！？」

キレル要に、苦笑いの山本。

「悪いがオレはマフィアなんかと関係を持つ気はない。沢田関係ならなおさらな」

「なあ、要。オレも入ってるんだけど」

「だから？言ったよな。オレはお前を友達としてみている訳じゃない。お前が勝手にそう思っているだけだ」

リボンとしては要に興味があるから、監視の意味もあってファミリーに入りたい。要としては、傍観者を決め込んでいるから、なんとしてでも入らない。

ある意味、因縁の対決となりそうだった。

「そうか。んじゃ、今じゃなくてもいいから、気が変わったらいつでも言え」

「嫌だ。気なんか変わらねえよ」

「小僧、帰ろうぜ？オレさままだ朝食くってないんだよな」

「そうだな。ママンも心配するだろうし」

結局しっくりこないままりボンと山本は家路に着いた。二人がいなくなってから、要がガッツポーズをしていたのは誰も知らない。

一方、リボーンと山本の方は。

「な、言つたる。あいつそう簡単には折れないぜ？」

「確かにな。だからこそ折つてみてーな」

「ハハツ。お前つて負けず嫌いなんだな」

「まーな。山本、お前的にはやっぱり霜月つて奴はいて欲しいか？」

その質問に山本は、顎に手を当てて考えた。

「んー？確かにいたらもつと仲良くなれるかもしんねーけど、あいつが嫌だと思つことを無理やりやらすのは嫌だしな。

オレ的にどうかって言われると、よくわかんねーな」

「そーか。

今日はありがとな。早い時間に起こして悪かった」

そうして二人は、朝日が照らし出した町を、それぞれの家に向かって歩いていった。

10、 おにぎり実習来る！

今日は家庭科実習でおにぎりを作る日。つまりはビアンキが来る日。
なわけで、

「何が食べたいですか？ヒバリさん」

ヒバリさんに、リクエスト。ホントは迷ったんだぜ？この生意気な坊ちゃんに作るかどうか。

「鮭」

そしてこの即答である。もっと考えろよ。

「つーか、それじゃ武とかぶるんだけど」

「僕以外とも約束してるの？」

「そりゃ、（ほんの少しだけど）武には（リボン関係で）お世話になったからな」

「ふうん。じゃ、コンブ」

「わかった」

よし完了。楽しみになってきたぜ。

「今日は家庭科実習で作ったおにぎりを」

「「「「男子にくれてやるー」「「「「「

おにぎりを手に教室にはいる。要もおにぎりを三つ（雲雀の分除く）
、作ってきた。

そして思った。

（ピアンキってどのタイミングで来るんだ？）

それは杞憂に終わった。それは何故か、彼女の後ろにピアンキが隠
れていたからである。楽しもう、そう思ったときだった。

「うわっ」

「きゃっ」

突然誰かに押され前のめりになる要。そして、前にいた京子にぶつかつた。そのまま京子はツナの前へ。要は、真後ろから舌打ちが聞こえた気がした。

ポイズン化していないおにぎりを手渡されたツナは、勿論そのまま食べ無事に終了。

「原作ブレイクじゃん!」

そんな要の叫びは、教室の喧騒へと吸い込まれていった。

「要、作ってくれたか?」

「あ、ああ。勿論だぜ。」

さあ、この三つのうち一つがお前の頼んだ鮭、二つが辛子入り納豆。自分を信じ選んでみる」

「な…なんだそりゃ」

そんなやり取りをしているところに、ツナ&獄寺登場。

「山本、霜月さんに作ってもらってたの?」

「まあな。」

「そつだ、ツナと獄寺にも選んでもらおうぜ」

山本の提案に、何言っただコイツ、という顔をする獄寺と頭に疑問符を浮かべるツナ。そんな二人に山本が事情説明。

「因みに要は、余計なことしゃがって、とか思っていた。」

「え、!?!」

「な？面白そーだろ?」

「霜月、ちゃんと食べられんだろつな」

「オレが毒を食わせるとでも思ってたのか?つか、どーでもいいからさつさと食べよ」

そしておにぎりは、山本・ツナ・獄寺の口の中へ。その結果は、

「かつ辛い~~~~~!!!!」

「うがつ!どんだけ入れやがつた!」

「お。鮭、当たったのな」

山本が持ち前の運の強さで鮭を引きましたとき。

因みに和泉は、本日風邪により欠席。

「ヒツバリさん もって来たぜ、お約束のコンブ」

「遅いよ」

「仕方ねえだろ。沢田のバカに付き合ってたんだから」

「君の分の仕事、そこに置いてあるから。さっさと終わらせてね」

「ういーっす」

そんな、夜の7:45。

「ツナ、霜月と仲良くなれたか？」

「何なんだよ、霜月さんからもおにぎり貰えって。あんなことで仲良くなれる訳ないだろ？」

ツナが山本のところに声をかけたのは、リポーンに要からおにぎりを貰うように言われていたから。実際は辛子入り納豆を食べて災難だった。

「うまくあいつと馴染めよ。せめて、友達になるぐらいにな」

「まさか、まだファミリー勧誘とか言ってるんじゃないだろうな」

「ピンポーン」

「お前なあ！」

今日も賑やかな沢田家。 8:30。

「ハア」。折角ピアノキとお近づきになるチャンスだったのに」

一人嘆く和泉。 10:00。

「ついでに今日も、平和に過ぎていくのであった。」
(B) 銀

番外1、 後の霧とお友達

ちーっす。現在オレは、近所の公園にいる。今日は珍しく風紀委員の仕事がないもんだから、ひっさびさの私服。

ベンチに座ってポケッツとしていると、遠くから軽快なメロディーにあわせてこんなのが聞こえてきた。

『アイスはいいりませんか。甘くてとろけるおいしいアイスはいいりませんか。』

「アイスくださ〜いっ！」

オレ、こう見えてもアイスが大好きなんだぜ？別に甘党じゃねーよ？ケーキだつてチーズケーキ以外食べらんねえし、チョコだつて嫌いだ。でもアイスは別だぜっ！

ダブルサイズのアイスを二つ買い、ぶらぶらと公園に戻ってきた。すると、さっきまでオレがいたベンチに黒髪の女子がいた。

ん？なんか見覚えあんな。誰だっけ？

雰囲気はフワフワしていて、常人離れたイメージ。……………風じゃん！！

「食べるか？」

気づけば左手に持つアイスを差し出していた。

「え？あの……」

突然出されたアイスに戸惑う凧(?)。ま、普通のリアクションだよな。

「ほら、溶けちまうぜ」

「え……？ありがとう……？」

受け取るのを確認し、隣に座る。

「あの……誰？」

「オレは要。霜月要だ。よろしくな」

「要……さん？」

「しお」

あ〜なんだか癒されるぜ。凧って半端なく可愛いよな。食べちゃい
t……失礼。取り乱した。

「お前はなんつーんだ？」

「…凧。三千院凧」

「凧か。イメージまんまだな」

とりあえず、とある漫画とフルネームが一致していることにはノー
ツッコミで行こう。

恥ずかしいのかなんなのか、凧は俯いてしまった。そのまま静かに
アイスを食べる。

頼む、黙らないでくれ。オレは沈黙が大の苦手なんだよ。

「あの…要さん」

「要でいいぜ」

「え…じゃあ、要？」

「なんだ？」

「どうして、アイスくれたの？」

どうして、か。オレにもわかんないかな？オレの行動はいつも気まぐれ。風紀委員に入ったのだって気まぐれに近い。ただなんて言うか、

「なんか、誰かといいたくなって言う雰囲気出してたから？」

「え……？／＼／＼／＼」

「なーんつつてな。けど、風が寂しそうな感じだったからって言うのは確かだぜ」

こんなにいい天気なのに、風の周りは曇ってる、そんなの嫌だろ？

「えっと……あの、と……友達になってくれますか？」

「はい？」

「あつ嫌ならいいの……。ただ、要がよければ……」

「いいぜ。全然オツケーだ」

風と友達になれるなんて、夢みてーじゃねーか。

内心ヒヤッホーッと騒いでんのを必死で押さえつける。だって

マジで騒いだら、凧がドン引くだろ？

「ならば、メアド交換しようぜ」

「うん」

赤外線通信で、交換完了つと。急いで凧のメアドを“親友”の欄に入れる。因みに言っておくと、武は“クラスメイト”、ヒバリさんは“風紀委員”ってトコに入ってるぜ。

「いつでもメールくれよな。オレいつでも暇だからさ」

「うん。ありがとう要。」

要っていい人」

いい人……か。そういつてくれた人は凧が二人目だな。一人目は、前世でのたった一人の親友。ま、その話はまた今度にして。

「じゃあな、凧。車に気をつけろー」

「また今度」

そういつてオレは夕日が照らす町を家に向かって歩き出した。

11、問七

夏休み真っ最中のこの時期。オレは家でクーラーをガンガンつけて涼んでいた。

が、突然来た一本の電話。ヒバリさんからだぜ？『今から10分以内に学校に来い』ってさ。

10分？チヨロいな。だって家から学校まで三分だし。

つー訳で、応接室にて仕事。

「この書類が終わったら、帰ってもいいから」

その書類はラスト十枚。何せヒバリさんの十倍の速さで書類整理してるからな。

「おわったぜ！よし、帰ろっ」

ヒバリさんの恨めしそうな視線は遮断して、学校を出る。と、そこで武と会った。

「よっ。風紀委員の仕事か？」

「もう終わったけどな。お前は補習か？」

「ああ。」

「そっだ、要ちょっとお願いがあるんだけどよ」

「ん？なんだ？」

引き受けなければ良かったとつくづく後悔する。

何がオレの家で宿題見てくれたよ。ここは沢田の家以外にどこだつて言っただよ。まんまと嵌められたな。

「武、どういっつもりだ？」

「たはは、わりい。小僧がどうしてもって言うからさ」

「あのチビ介はどこまでオレに付きまとうつもりだ？」

「チビ介は余計だぞ」

後ろから来る殺気。チビ介の登場である。

「ま、別に宿題を見てやるくらいはいいんだけどな」

「サンキューな」

「けど、一通りできるまで、オレは寝る」

だって、全部見ちまったらこいつのためになんねーからな。

終わったら教えてくれよー。

そしてオレはそのまま眠りについた。

「起きろ、要、起きろって」

「ん？」

武に名前を呼ばれ、目が覚めた。

「終わったか？」

「それがよ、この問七だけがわかんなくてな」

問七？まさか今日はあの問七の日なのか？の割には獄寺はいないし、ハルが来る気配もないし、がまん比べ大会もない。

ホントにあの問題か？

「見せてみる」

問題用紙を見る。ああ、確かにあの問題だな。

「これは4だ。ネコじゃらしの公式を使えば、簡単な話だ」

これ、マジで計算したぜ？原作知識とかじゃなくってマジな暗算。

「すげーのな。要って何でそんなに勉強ができた？」

「西条考古学院って聞いたことないか？」

「「西条考古学院？」」

「知ってるぞ。世界でも指折りにはいる超難関校だぞ」

「オレは前、そこに通ってたんだ」

「「なっ!?!」」

「んじゃ、オレは帰って寝る。じゃあな」

誰かに呼び止められる前に、ダッシュで家に向かう。

そして家に入った瞬間、ベッドにダイヴし、そのまま眠った。家の鍵をかけるのを忘れて。

12、 入江正一に会う

おっす。前にも言ったが、現在夏休みの真っ最中。

いつも通り、家でクーラーをかけてるんだが、何故だか一人多い。その一人とは、

「やっぱりお前んちって涼しくていいよな」

「何でお前がいるんだよ、銀」

そう、コイツ。朝起きたときには、既にクーラーがガンガンで寒いくらいだった。電気代がバカになんねーだろうが！

「何でって、これつけたのがオレだって忘れてる？」

「へ〜それは知らなかった」

「知んなかったのかよ！」

知るわけがないだろ。始めからついていたら、元からあるものだと思っただぜ？

「さて、銀。今日は何の日だ？」

「何の日って？お前の誕生日とか？」

ゴチン

「いでっ！何すんだよ！」

「そうじゃなくて、リボーンの原作の話だボケ」

言われて“ああ、なるほど”という顔をする銀。マジで質問の意味が分かってなかったのかよ。

「えーっと確か……入江正一か？」

「正解。あれって何時ごろからだっけ？」

銀はチラリと時計を見た。そして小さくぼやいた。

「始まって十分……」

「行くぞ」

「え？オレも行くのか？」

「当たり前だろ。なるべくオレが原作に介入しないようにサポートしてもらうんだからな」

「この格好でか？」

今更ながら、銀の格好を説明しよう。

白い着物をなんかゴージャスっぽくした感じのを着ていて、純白の羽をばたつかせている。

これが朝っぱらからいるんだぜ？嫌になるだろ？

「オレの服、貸してやるから十秒で着替えて来い」

「イエッサー」

「沢田の家は、このあたりだったはず」

山本に連れられた日のことを思い出しながら道を歩く。すると、すぐ近くのところで爆発音が聞こえた。

「お、ここか」

爆発音の正体は、ランボの手榴弾。正直言って、今ここで始めてラ

ンボ見たぜ。

入江正一はっと………。いたいた。案の定電話してるぜ。

「リボンさんがランボにドカーンだよー！」

！？

ドカーンと買ってないー！」

………。間近で聞くと、五月蠅いな。原作読んだときは“かわいいそー”とか思ってたけど、こっちやってみると、笑える。

「お前、性格悪いな」

「ん？そつか？」

「コラ！」

「やべっ隠れるぞ」

沢田の声が聞こえたので、ひとまず近くの塀に隠れる。ここなら向こうからは見えなくても、こっちからは見える。

が、不運なことに声は聞こえなくなった。

このとき何故かオレは、ブレスレットを使うということまで考えが至らなかった。

見ることも数分。ランボが10年バズーカを打ち、ビアンキがロメオと間違え銃を乱射、沢田が死ぬ気になって止めようとするも失敗。

こんなところである。

そして見事に失神した入江。さすがに可哀想だから介抱してやるか。

「銀、入江を連れて家に帰るぞ」

「は？え？何であいつも？」

「あのままじゃ、可哀想だろ？それとも、神様のくせに見てみぬ振りか？」

「連れてくよ！連れて行けばいいんだろ！」

そういうと銀は、走って入江の元に向かった。その間にオレは家に向かう。

『要のバカヤロ〜』

後ろから聞こえてくる声は無視しておこう。

「……あれ、ここは？」

「おっ気がついたか！」

ようやく気がついた入江。銀に水を持ってこさせる。

「大丈夫か？」

「あの、あなたは？」

「オレは霜月要。んで、こいつは銀、オレの友達ダチだ」

「はあ……。あの、ここは？」

「ここはオレの家だ。お前、道端で倒れてたから介抱してやってたんだぜ」

「いまいち何があったのか分からない様子で、入江は首をひねった。どうやら倒れる前のことを覚えていないらしい。」

「ま、そりゃそうだろうな。アレは忘れたほうがいい。」

「そうですね。僕はもう大丈夫です。ありがとうございました」

「そか。んじゃ、気をつけて帰れよ」

「お辞儀をして出て行く入江。フラフラだけど大丈夫なのか？」

「途中で入江は立ち止まり、こっちを向いた。」

「僕は入江正一です。今日はお世話になりました」

うん、名前は言わなくても知ってるからな。

隣では、何故か心配そうにこっちを見る銀。

「なんだよ」

「いや、今ので相当原作とずれたかも」

「……………MA・JI・DE?」

「多分だけだな」

やっちまったあああああああ!!!!!!

13、 応接室

「恭、仕事まだ残ってんのか？」

「いや、丁度終わったよ」

ちつす。つい最近まで夏休みだとか暑いだとか騒いでた要だぜ。

今は応接室で仕事の処理を終えたところだ。

恭、っていうのは二学期に入ったときに、ヒバリさんが

「いい加減に“さん”をつけるのはやめろ」

って言ったから、こっつ呼んでるんだぜ。

「ん」

「何、その手は」

「何って約束だろ。チーズケーキ」

「ああ。ホラ、ここにあるよ」

「ようじゃっ」

テーブルの隅っこにおいてあった箱を取り、チーズケーキを食べ始めた。くっっ、やっぱりケーキに生クリームなんて考えられねーよ。そんな時だった。

ガチャッ

突然応接室の扉が開いたと思ったら、そこから武が現れた。

うそおおっ！

慌てて部屋の隅っこに移動する。ついでにブレスで気配を消す。

よし、食事再開。

ドガッ

沢田が恭に吹き飛ばされる。

よえー。

「ツナ！くっ」

水天逆巻け

捻花！！」

いや、弱いんだから止めとけよ。

「何それ。武器の持ち込みは禁止だよ」

「関係ない！私はあなたを倒すわ」

「ワオ。勢いだけは認めてあげるよ」

ビュッ バキッ

「！！」

ははは、無様だな村上和泉。綺麗に斬魄刀が折れたね。君に戦う手立てはもう無い。

「そこまでだヒバリ」

あーこの声はチビ介ですねー。（フラン的な）

勿論手には爆弾が……

爆弾？やべーよ、オレまで死ぬって！

そんな間にも導火線は短くなっていき……

「吹き抜ける　　霜天氷龍！！」

パリン

爆弾は凍り、オレの周りに張られていた結界は破れた。

「「「……「「「」

止めるし、そんな目で見るなよ。

「霜月要……いつからいた」

「最初っから」

「嘘を吐くな」

「これっぽっちも嘘なんて吐いてねーぜ。な、恭」

無理やり恭に話を振る。

うん、って言うてくれ。頼む。

「確かに要は始めからいたよ」

勝った。

って言うかさつきから村上和泉からの視線が痛いんだけど。

「霜月さん、話があるんだけど」

「オレはないね。んじゃ恭、オレは帰る！」

有無を言わずに窓から飛び降りる。

「じゃあな！」

分速1kmで走り去る。

あゝあゝ~~~~~~~~、
「こまできたらもう傍観できねーじゃんか
よ！」

とか思いながら。

14、霧とお買い物

現在の居場所は、並盛商店街。

隣には風。

ここに至るまでの経緯を話すことから始めよう。

事は昨日の夜に遡る。

夜、部屋でゲームをしていると、携帯電話が鳴った。

確認すると、凧からのメールだった。

宛先：要

送り名：凧

内容：明日、ヒマ？

良かったら、一緒に買い物に行かない？

おっしゃー！ー！！

即返信。

宛先：凧

送り名：要

内容：いいぜ！

オレは全然オツケーだ！

送信つと。

送信して十秒後。再び携帯がなった。

返信早いな!?

宛先：要

送り名：凧

内容：ありがとう。

それじゃあ、明日の十一時に、並盛商店街で。

と言ったことがあったから、今ここにいます。

「要、何か買いたいものある？」

「いや、特に無いぜ。そう言う風こそ、買いたいものがあるからオレを誘ったんじゃないかねえのか？」

「……………うん。この前見つけて、それで、要とお揃いで欲しかったから……………」

風に連れられてやってきたのは、ファンシーショップ。

凧。それはイジメか？新手的イジメなのか？いや、でも凧がそんなことをするはずは……。

「な、凧…これは一体……」

「ごめん……。要が女の子の物が嫌いなのは知ってるけど……」

けど？何！？

「けど、それでも要に見て欲しい物があるから……」

………！！

凧、泣いてる…？

何で泣いてんだよ……。

風が手渡してきた物、それは

チヨーカー！。

「1J……1Jねは………」

ハートの形をした、一對のチョーカー。

片方は中の空いた大きなハート。もう片方は隙間の無い小さなハート。

二つを合わせることで、一つの大きなハートが出来上がる。

「これを見つけたとき、要のことを思い出したの。

ずっと一人だった私の心を埋めてくれた要を」

「凧……」

いや、心を埋めてもらったのはオレのほうだ。

ありがとう、買ってあげ、これ」

「うん……」

レジに持っていき、そのチョコレートを買った。

オレが大きいほうで、凧が小さいほう。

何故か店員に、カップルと間違えられ、オレと凧は顔を真っ赤にし
ながらその店を後にした。

「今日は誘ってくれてありがとう」

「うん。こっちは来てくれてありがとう」

今日買ったチヨーカーを見つめる。

「これ、肌身離さず持つてるよ。親友の証だよ」

「親友……うれしい」

凧がパアツと顔を明るくした。

やっぱり明るくてこそ、凧だな。

「そろそろ門限だから……」

「そっか。じゃあな」

……車には気をつけるよ

「さっし」

凧が帰っていく様子をずっと見る。夕日に照らされて凧のほぼが、赤く染まっていた。

もう一度チョーカーを取り出し、空いている部分に夕日を重ねる。

夕日がハート型に見えた。

そのチョーカーを、前からずっとつけていたもう一つのチョーカーと一緒に、首にかけた。

十字架のチョーカーと、ハートのチョーカー。

全くタイプの異なる、二つの宝。

それでもこれは、どちらも、“親友”からの贈り物。

「彩加……。お前が生きていたらまた違う人生だったかもな」

14、 霧とお買い物（後書き）

えっと、彩加ってのは、要の前世での親友の名前です。

彩加については、そのうち書く予定です。

15、 入江、傍観者を訪ねる

「確か、このあたりだったような……」

僕は今、ある人の家を探していた。

いつだったか、僕を助けてくれた優しい人。

曖昧な記憶をたどりながら、彼の家を探す。

「あ、あった」

“霜月”とプレートのかかった家。

ピンポーン

『はい』

インターホンを押すと、中から声が返ってきた。

開いた扉からのぞく、エメラルドグリーンの髪。あの時と同じだ。

「あ……」

自分を見つめる緑色の瞳。何か冷たい物を感じる。が、それは一瞬だった。

「入江！よく来たな。」

なんもないけど、とりあえずあがって行け！」

笑顔で出迎えてくれた。

リビングと思われる部屋に通される。

「今お茶出すから、ちょっと待っていてくれ」

「はい」

霜月さんが、台所へと姿を消す。その間に、リビングをぐるっと見渡した。

モノクロで統一された家具たち。外はまだ明るいと言いつのに、その家具やカーテンによって薄暗かった。

125

「ほい。レモンハーブティーだ」

「ありがとうございます」

お礼を言うつと、霜月さんは一瞬ビックリした顔になり、クスクスと笑い出した。

「あははっ、オレに敬語なんて使うなよな。

オレのほうが年下なんだぜ？」

「そ、そうなんだ」

よくわからないまま、出されたお茶を飲む。ほんのりした香りが、気持ちをリラックスさせてくれた。

「おいしいね」

「だろ？」

そういえば、何でウチに来たんだ？沢田の家が近いから、また変なのに巻き込まれちゃうぜ」

「お礼を言いたかったんだ。あの日は、ろくにお礼も言わないで、すぐに帰っちゃったから」

改めてお礼を言いに来たんだ」

僕はあの日からずっとちゃんとお礼を言ってなかったことを後悔していた。

だからこうやって来た。

「入江って律儀なんだな」

「そんな事ないよ！ただ、本当に感謝してるんだ」

「やめるよ。オレはそんな出来た人間じゃねえしな」

「どつして霜月s……むぐっ」

口に何かが入り込まれる。甘くて柔らかい。

マシユマロだった。

「だから、敬語は使うなって」

「えっと、じゃあ、要s……むぐっ」

またマシユマロを口に入れられた。

「要どいさっし」

「……はい」

その後、僕は要クンと一時間ほど話し、家に帰った。

お土産として、500グラム入りのマシユマロの袋を買って。

「……こんなに食べられないよ」

16、 体育祭

あゝ気づいたら体育祭の時期だよ。

書類の整理やってたときに、さりげなく存在してたし。

ってか、それで気づいたんだけどな。

それだ。

「総大将、任されてくれないかな？」

何でオレが男子種目である“棒倒し”の総大将を頼まれてんだ？

「沢田、よく考えてみる。オレは女だぞ。」

どうして男子の種目に参加しなくちゃなんないんだ？」

「オレが推薦したんだぞ」

この声は、毎度毎度おなじみの、お騒がせなチビ介か。

「テメエ舐めたことしてんじゃねえぞ」

「別にいいじゃねえか。きっと楽しいぞ」

「楽しいわけあるか！」

落とすためなら殴る蹴るありのサイテーな種目なんぞ

絶対にやんねーかなー!!」

「なあ恭」

「なに？」

「オレが男子の種目に出るのってありえねーよな？」

「棒倒しのことかい？」

「そーだよ。何で知ってたんだ？」

「そりゃ、僕が許可したからね」

「お前かああああーっ！！！！」

コイツ絶対に殺す！

地獄に行ってもゼツテーに殺してやる！！

「もし、勝てたらまたチーズケーキ買ってあげるけど」

「うぐっ……」

それはするいだろ。

「わーっ たよ。やればいいんだろ？やれば」

「ちなみに、負けた場合は委員長補佐に任命するから」

「命を懸けても勝たせていただきます！」

っというか……

恭って、学年とかクラスとかがっでどうなってんだ？」

「僕は好きなときに好きな学年・クラスにいられる」

あ、声に出たか。

っーか、そういえば、六巻あたりでそんなこと言ってたっけな。

月日は早い物で、いつの間にか体育祭当日だぜ？

「ま、そういうことだから、棒を倒したやつは、ぶっ飛ばすからな」

満面の笑顔で言ってやった。つまり、恐怖でクラスを支配中。

一個言い忘れたが、総大将が沢田じゃないせいで、A・B・Cクラス、全てきちんと揃っている。

「用意

開始！」

「がっ！」

「ぎゃっ！」

さらに言うておくと、ドサクサ紛れに恭に武器の使用を許可してもらった。

ま、武器と言えるようなもんじゃないが、拾っておいた小石を指ではじき、B・Cの総大将に当てる。

バランスを崩させるのにはこれで充分だ。

あとは、ぱっと見凶体がでかくバランス感覚も悪そうだったから、勝手に落ちるのを待つ。

と思ったけれど、案外そう甘くなかった。

かたっぽは落ちたけれど、もう一人がなかなか落ちない。

確かアレは、高田とか言うやつ。

デブのくせに。

「オメーら、ちと衝撃が行くが、踏ん張れよお」

「「「「??????」」」」

「いくぜ、霜天氷龍」

空気を震わせるような振動が起きる。

これでオレが得たのは小さな氷の欠片。

たったこれだけを出すのにも、相当な力が必要なんだぜ？

んで、その氷を小さな龍の形にする。いくなれば、百蘭の“ミニ白龍”の氷版ってとこだ。

「奈落のそこへ行ってらっしゅい」

投げたソレは、見事に高田の手に命中。

「うわあああああ」

『勝者、Aクラス』

うわー、なんか単純すぎた。

「要、これ」

チーズケーキを頼張るオレに、恭が何かを渡してきた。

「腕章？なんでだ？オレはどっくに貰ってるじゃんか」

「そうじゃない。よく見て」

言われて、腕章に書いてある文字をよく見る。

えーっと

<風紀委員長補佐>

「何故にっ!?!」

「Aクラス勝利のご褒美」

「全然ご褒美になってねえええーっ!?!?!」

17、 何入院してんじゃボケエ

「おっちゃん、リンゴ一つとバナナが三本、あとはメロン一個ちょーだい」

今オレは八百屋にて見舞い品を買っている。

誰の見舞いかって言うと、恭だ。

なんか、風邪をこじらせたんだと。んで、オレに見舞いに来いって。

あ、そーだ。

「おっちゃん。パイナップル一つ追加で」

これは外せねーな。

並盛中央病院。

「おい、見舞いに来たぜー」

「遅いよ」

病室に入ると、ケツコー広い個室だった。

恭はベッドに座って本を読み、部屋の隅には死体（？）が四つ。

「病院でくらい大人しくしてろよな」

「やだ。退屈だからね」

「まったく、ホレ果物持ってきてやったぞ」

恭にフルーツの入ったバスケットを差し出す。

「じゃあ、むいておいて」

「なんで?」

「僕は病人だよ」

む、いつもの理不尽が来た。ま、確かに病人らしい

…今回はいつか。

最初にナツポーに手を伸ばす。

これがケツコー硬いのだが、プレスを使えば造作もないのだ。

「ホイ、口開ける」

「ん」

冗談だったのだが、マジで口をあけた恭。

ビックリするのメンドかったので、口にナツポーを放り込む。

他の果物でも同じ事を繰り返し、いつの間にかバスケットの中は空っぽだった。

「要は食べなくてよかったの？」

「何で見舞い品をオレが食べんだよ。あとで自分で買ったし」

「ふうん」

ん？どーしたお前。顔が赤いぞ？

あ、熱あんのか？

「そんじゃ、オレ帰るな。安静にしとけよ病人」

「……咬み殺されたいの？」

「イヤだね。仕事はできる限りオレがやっというてやるからよ」

「あっそ」

あっそつて。感謝の意がこもってないぞ!?

そこは、ありがとうとか言わなきゃだろ!

「……………ハア。じゃあな」

疲れた。多分、体育祭のときより疲れた。

帰り、ナツポーを二つ買って、なんとなく凧の家へ送った。

ホントになんともなくだ。

その日の夜にメールが来た。

宛先：要

送り名：凧

内容：パイナップルありがとう。

おいしかったよ。

全部綺麗に食べたらしい。

ウム流石だな。

18、 最悪の授業参観

明日、人生でもっとも嫌いなイベントがある。

授業参観。

親のいないオレにとっては、苦痛でしかない。

のだが……

「え？なにに？授業参観？見に行くー！」

今はこいつがいるんだったな。

「なあ銀。明日の授業参観、マジでくんのか？」

「何言ってるんだよ、当たり前じゃんか」

「お前、村上和泉に面が割れてんじゃねえのか？」

「はあ。お前は神様の力を侮っているな。奴にばれないように行くに決まってるだろ？」

完全にオレの保護者気取りだな。

「せめて、大人しくしてくれよ」

「山本、この問題を解いてみる」

今回の授業は数学。

先生は、数学の苦手な奴から指すと言って、武を指していた。

「んじゃ、 $1/2$ あたりで」

また当てずっぽう戦略かよ。好きだな。

「コラ！ってん？」

いや…正解か」

その度に当てるというは、運が良すぎると思う。

「まったく、くだらねーぜ」

武が正解したことによって賑やかになっていた教室が、静かになった。

声の主は獄寺。

机に足をのっけ、教科書すら出してない。

まあ、教科書を出してないのはオレも同じだが。

「獄寺、授業参観のときぐらい普通に座ってみんか？」

「ムリ」

「！ じゃあ難しいが

次の問題を獄寺……」

「7 cm₂」

先生の言葉に被せ気味で答えた獄寺。

正解なので、先生に口出しはできない。

「プハッ」

「!?!」

おっと、思わず笑っちゃった。

「霜月、お前も態度が悪いぞ！マンガなんか読みおって！」

「何か文句あります？あんなら、どんな難しい問題でもだしやいいじゃないツスカ」

「言ったな？それならP・58の問九を解いてみる」

五十八：五十八：つと、あった。

「2 5 + 7 3。文句ないっすね？」

さっと目を通しただけで答える。この間0・002秒。

「チツ正解だ。次、沢田。問四だ」

「なあっ!？」

む、詰まらん。暇だし寝てしまおうか。

でも、ここで寝たからといって銀に会いにいけるわけじゃない。

理由は、銀はすぐそこにいるから。

その隣には、おばちゃんに扮したチビ介。

これは、オレにとって良くないことしか起こる気配なし。

よう。

「帰るっ」

「「「「えええー！？」「「「「

プレスを使って銀に連絡する。

『帰るぞアホたれ』

『アホとは何だ！アホとは！』

うるせつ。

「つーことで、オレ帰ります」

「おい、コラ！霜月！！」

先生の制止なんて、シカト

なんつーか、最近はやメンドくて原作の傍観とかしてないな。

と言つより、既に傍観どころじゃねえけどな。

18、 最悪の授業参観（後書き）

最近テキストなのは、本気で日常編って詰まんないなー、とか思いながら書いてるせいだと思う。

要「つまんな過ぎて、たまにオレの名前とか忘れるもんな」

そんなことはないけど。

19、お正月……のはずだけど

A HAPPY NEW YEAR!!

うん、今日はお正月だよ。

気が利いてるのか、今日の風紀委員の仕事はなし。

さーって、何をしようかな。

もーホントに最近原作通りなんて、気にしないし

プルプル

「んお、メールだ」

宛先：要

送り名：武

内容：なあ、今日暇か？

川原でお正月ならではの遊びゃんね？

お正月ならではの遊び？まいつか。

宛先：武

送り名：要

内容：ういーっす。

なんだか知らないけどいいんじゃね？

知り合いを一人連れてくから。

んじゃ。

「来るってね」

「サンキューな山本」

川原にいたのは、キャバツローネファミリーとリボーン一行。

いつもの如く、リボーンが山本に頼んで要を呼び出したのだ。と、

「
お〜い
」

遠くから走ってくる影が二つ。

「よっチビ介。やっぱりお前か」

「気づいてたんだな」

「当たり前だろ、ボケ」

「んで、後ろの奴は誰だ？」

リボンがさしたのは、要の後ろに隠れるようにして立っていた銀。

要がなんとなくで連れてきたのだ。

「コイツはオレの義理の兄貴ってとこだな」

「あれ？霜月さんって家族いたんだ」

「ツツ！！！」

和泉の言葉に、要の殺気が一気に増幅した。

超一流の殺し屋であるリボンでさえ、指一本動かせない。

「オレは…オレの家族は…ツツ」

「要！」

「お前らなんか」

「要エツ！！！」

ドンッ

空気を震わせる衝撃音とともに、要がゆっくりと倒れた。

後ろにいたのは銀。

そう、銀が手刀で要を気絶させたのだ。

同時に殺気が消え、全員が動けるようになった。

「あ、あんたは……」

和泉が銀の正体に気づいたが、口をふさがれたように、

言葉を繋ぐことはできなかった。

静かに銀を見つめる。

銀も静かに和泉を見つめていた。

「悪いな。最近疲れがたまってたみたいだからな」

「あ、あの……霜月さんの家族って」

「そこまでだ。それ以上は喋ってはいけない」

銀が視線をツナに移す。その視線にツナは押し黙ってしまった。

「じゃあな」

要をお姫様抱っこしてその場から去った。

「……要」

「……おい、要！」

正月から三日が経っていたのだが、要は一向に目を覚まさなかった。

「くそっ、あのクソ女……」

余計なことしやがって……」

クラッシュしやがったか。こいつの心次第か。

『銀』

！ この声は……！！

「大神様」

オレ達神の頂点に立つ、大神様こと惣右介様。

『惣右介でいいよ』

「惣右介様、一体何事でしょうか」

『その女の子のことで話がある』

「はい」

『それとお前を召喚したあの女だ』

オレは要を家に残し、惣右介様について行った。

「父か？…母か？…」

20、 壊れた未来

オレが連れてこられたのは、一つの部屋だった。

惣右介様の部屋だ。

ここに来るまでにオレ達は一言も発しなかった。

だから、何故ここに連れてこられたのかは分からない。

「銀、君に見てもらいたいものがある」

「オレに……ですか？」

「そうだ。これを見てくれ」

そういうと、惣右介様はパネルを操作した。

オレの目の前に映像が映し出される。

それは戦場だった。

肉片が裂ける音が響き、断末魔が轟く。

地面は血を吸い、紅に染まっていた。

「惣右介様……これは…一体…？」

耐え切れずにオレは聞いた。

彼の答えは信じがたいものだった。

「これは、未来だ」

「未来……?」

「そつだ。霜月要、彼女のいる世界の未来」

「なっ!？」

そんなバカな!!

どうしてこんなことに……

百蘭が巻き起こした³の比じゃない!!

「これは、あつてはならない能力を持った、

いてはならない異物がいたために起きた。

それが、君があの世界に送った、二人の少女

村上和泉と霜月要によって引き起こされた」

「あの二人が……」

手立ては…これを止める手立てはないのですか!？」

「あるさ、勿論ね」

これで、世界の破滅を食い止められる。これで……

「手立ては一つ。どちらかがその能力を失うこと」

「能力を失う？」

ですが、和泉は神の掟によってその願いを叶えられた者

要はオレのせいで天寿を全うできず、伝統にのっとって力を授かった者。

どちらの能力も奪うことはできないはずです!」

オレ達、神の中にも“掟”が存在する。

特殊召喚された神は、召喚者の願いを二つ、必ず聞き届ける。

例外はない。

そして、神のミスによって天寿を全うできなかった者には

その神が責任を持って、その人間が望むようにする伝統がある。

どちらもそのときに叶えたことは覆ることはできない。

だが、今回はそれによって引き起こされてしまった問題。

覆すしか手立てがないのか

「確かに、神が定めたことにはそれ以上神が手を出してはいけない。

だが、それが人間ならばどうなる？」

「！！ 事故に見せかけ、どちらかがどちらかの力を消す、

と云うことですか？」

「君は理解が早くて助かるよ」

和泉が要の力を消す、又は、要が和泉の力を消す。

つまりはそういうことだ。

「いつ、どちらの能力を消すかは君に任せるよ。」

尤も、どちらにせよ早くしないと意味がなくなってしまう。

期限は一年。わかったね」

語尾疑問系じゃねえ……ッ

これは絶対ってワケか……くそっ

「……分かりました。一年以内には必ず」

「任せたよ」

家に帰ると、要はまだ寝ていた。

いつ起きるのは分からない。けど、起きたときに……

この話をするべきなんだろうか……

いや、話さなきゃいけないんだ。

要……オレ、どーしたらいいかな？

番外2、 人生の日記

これは、とある少女について記された

小さな手帳につづられた日記。

そこには、少女の波乱万丈な人生が綴られていた。

11月2日。初雪が降ったこの日、

私たちに二人目の子供が生まれた。

夫と相談して、名前は『要』に決めた。

いろんな人に必『要』とされる人に育って欲しい。

そういう願いをこめて。

12月25日。クリスマスイブ。

私達は、ある異変に気づいた。

要の容姿が普通とは違うことに気づいてしまった。

エメラルドグリーンの髪に緑色の瞳。

夫は不気味がってたけど、私は違う。

だって今日はクリスマス。きっと神様からのクリスマスプレゼント
ね。

1月1日。

この子が生まれてから、初めて親戚が集まった。

皆口々に言っていた。

「氷のようだ」

「悪魔の子だ」

と。誰にも受け入れてもらえない、可哀想な子。

8月3日。

要が生まれてから二度目の夏。

今日も要は私たちを驚かせてくれた。

脅威の頭脳。

ほんのおふざけのつもりで高校のテキストを渡したら、

いとも簡単に解いてしまった。

たった三歳の小さな女の子が！！

ガシヤーンッ

9月15日。要、五歳。

両親が強盗殺人に遭い、死亡。

要は幼稚園にいたために難を逃れた。

しかし、その事件の所為で、彼女は呼ばれるようになった。

「死神」と。

4月23日。要、七歳。

私に初めての友達ができた。

彼女の名前は高城彩加。

他の子と違って、自ら友達になろうとやって来た。

私の初めての友達。

7月7日。七夕。

今日は彩加の誘いで買い物に行った。

そこでプレゼントされた、一つのチョコレート。

十字架の付いた小さなチョコレート。

母さん以外に貰った、初めてのプレゼント。

ありがとう彩加。大切にするね。

10月12日。要、十二歳。

彩加が死んだ。

私の目の前で、信号無視のトラックに撥ねられて。

彼女に伸ばしたては血にまみれ、私は飛び散った彩加の血にまみれた。

私を認めてくれた、たった一人の親友は、この世からいなくなった。

これで私はまた一人ぼっち。

誰の目にも留まらず、ひっそりと生きていく。

4月6日。要、十三歳。

桜が舞うこの季節、私は西条考古学院に入学した。

そして、私は『私』を捨てて

『オレ』として生きることを決めた。

11月3日。要、十五歳。

オレは死んだ。

交通事故に巻き込まれて。

そしてオレは

リボーンの世界に行くこととなった。

21、 神様の苦悩

お正月から一ヶ月が過ぎようとしている。

要は相変わらずの状態だった。

なぐんでこんなことになったかな。

P r r r r

ここ最近ケータイが鳴りっぱなしだ。

差出人は『武』とか『凧』とか『入江』とか。

ってその三人しか来ないけど。

こいつの状態を惣右介様に相談してみたが、何の解決にもならなかった。

『ただこいつを信じる』と、それだけだった。

信じちやいるぜ？こいつがそんなに簡単にくたばんないってや。

ピンポーン

誰だ？こんなときに。

ガチャッ

「あ……あの……」

凧だった。

「要の家って……」じいであってますか……?」

「ああ。合ってるぜ。上がってけよ」

「……………はい」

こいつに合わせるかどうか悩んだ。

あんな状態の要を見たら、ショックを受けるかもしれない。

でも、会わせただろうが要にいいのかもしれない。

結果は、会わせることだった。

「かな……め……?」

やはり、ショックだったらしい。

「一体…何が…」

「ちょっと色々な……」

正月以来、この状態なんだ」

「そんな……」

凧は要にとってのたった一人の親友。

それと同じように、凧にとっても要はたった一人の親友。

オレは成す術もなく、ただ見てるだけ。

……神様のくせに何もできないなんてな。

「……」

「要……！」

「さい……か」

「え？さいか……って誰？」

「高城彩加」

要がお前と出会う前に持っていた、たった一人の親友。

三年前に死んでるけどな

「……？」

これは言って良かったのだろうか？

もしかしたらオレが言うのは良くなかったかもしれない。

でもなぜか、彩加の存在を言わずにはいらなかった。

「要……私がいるよ……」

私たち……親友でしょ……？

お願い、目を……覚まして……！」

凧は泣いていた。

「っ……っ……」

「！！」

「要！？」

「…な…ぎ…？」

「要！？目が覚めたか！？」

「銀……」

よかった。ホントに良かった。

「要えっ」

凧は、泣きながら要に抱きついた。

要は、泣いている凧を優しくなでた。

オレは、それを傍から見守るのみ。ただ、こいつらの幸せを願って。

「よかった……」

「要、お前一ヶ月も眠ってたんだぜ？」

「！！ そんなにか……！？」

「そうか……ゴメンな風。心配かけて」

「いいの。要が無事だから」

もしも要が力を失ったら、平和に過ごせるかもしれない。

だが、後に争いに巻き込まれてしまう風を守れないかもしれない。

要の力を奪うべきなのか、否なのか。

オレにはまだ決心がつかない。

オレは神様だ。

誰にも平等に平和を与えなければいけない。

一人の人間を鼻屑することは許されない。

それでも、オレにも守ってやりたいと気持ちを与えてくれる、

要はそんな人間だ。

力を奪うなんて、オレにはできない。

期限は一年。その内一ヶ月が過ぎた。残りは十一ヶ月。

やはり、力を奪うべきは和泉のほうだろうか。

だが奴も、ツナたちを守ろうと必死になっている。

原作を壊してしまうかもしれない勢いで。

要は気づいていないが、和泉の能力のうち幾つかは、

本人が自ら手に入れたものもある。

普通ならありえないこと。

そしてそれは、“覚悟”の大きさでもある。

要からしたら、邪魔でしかないかもしれないが、和泉だって必死になってる。

“誰かを守りたい”

その“覚悟”がどちらにも備わっている限り、オレは決められない。

決めるのは、お前たちでしかない。

22、 バレンタイン・デー

二月十四日

この日の並中は騒がしかった。

「霜月さん！私のチョコ貰ってください！」

「私のも！」

「私のも！」

そしてなぜか、要は武よりも絶大的人気だった。

「あゝ、そんなに貰ってもな〜（っていうか、オレは女だし）」

当の本人は、苦笑い。と言うより迷惑がっていた。

要が用意したチヨコは、雲雀に一つ、武に一つ、凧に一つ、正一に一つ、銀に一つ、おまけ三つの計八つだった。

勿論ツナや獄寺になどあげる気はさらさらない。

和泉となれば尚更である。

「ははっ、要ってホントに人気なのな」

「のんきに言うな!」

「霜月さんってなんか羨ましい……」

「そーっすか？」

それを遠くで見ているツナと獄寺。

チヨコの貰い率は、要>武>獄寺>ツナと言った感じだ。

まあ、妥当なのだが。

「あゝもうメンドイ！渡す奴はさっさと渡して帰れ！！」

「キヤ~~~~~！！！！」

要はキレているはずなのだが、周りの女子の反応は、あからさまに歓声だ。

貰う物をさっさと貰い、女子の人ごみから出て来た要は、教室から出て行ってしまった。

「まったく……オレは女だっつーのがなんで分かんないかな……」

それが自分の容姿の所為だとは露ほども気づかず。

要が向かった先は応接室。

中では雲雀が仕事をしていた。

「恭、チョコ作ってきてやったぜ」

「ふ〜ん」

「ふ〜ん、つてもうチョコイ嬉しそうに言えよな。」

オレが誰かにチョコ作るなんてメツタないんだぞ」

「あっそ」

「……あーわかった。お前からの礼を期待したオレがわる」

「ありがとう」

「へ？」

突然聞こえてきたお礼に、要は拍子抜けた声を出してしまった。

「今なんて？」

「だから、ありがとう」

再びお礼を言った雲雀の顔は、心なしか赤く見えた。

そんな雲雀を訝しげに見ると、まいつか、と言って目線をそらした。

「今は手が離せないから、机の隣にある袋にでも入れといて」

「うーい。(袋?)」

「……な!？」

そこにあっただのは、大きい紙袋が二つ。

そして、その中に入りきっていないチョコたち。

(やっぱり、恭って人気者だなあ)

そんなことを思った要だった。

応接室を出て人を避けるように教室に向かう。

教室には未だに女子が群れており、到底要が入れる様子ではない。

が、幸い目的の人物は入り口付近にいた。

「武……おい、武ってば!」

「お、戻ってきたのか？」

「しー。お前にチヨコやるよ」

「ホントか!？」

「だから声がでかい！」

女子に気づかれぬように小声でやり取りをすると、鞆の中からチヨコを出して武に渡した。

雲雀のもそうだが、きれいにラッピングされていて、『武へ』と書かれていた。

「んじゃあな。オレは帰るから」

「ああ。また明日な」

要はそそくさと学校を後にして、黒曜へと向かった。

目的は、凧に友チヨコを渡すため。

いつだったか、凧に渡された地図を頼りに見慣れない道を進む。

見つけることはそう難しくはなかった。

地図が分かりやすかったのと

「でっけ〜」

家がお屋敷だったこと。

ピンポーン

インターホンを鳴らす。中から返事が聞こえてきた。

すぐに玄関の扉が開かれる。

「よっす。チヨコあげに来たぜ」

「あ、要…」

出てきたのはちょうど風だった。

いや、風以外、家には誰もいなかった。

「ありがとう…」

あの…私もチヨコ作ったから」

「風もか？」

「うん。よかった」

「サンキューー！貰っぜー！」

家には入らずに玄関でやり取りをする。

要がチヨコを渡し、凧もチヨコを渡す。

「そつだ！今度ウチに泊まりに来いよ！銀もいるしカンゲーするぜ」

「え…いいの」

「勿論だ」

約束を一つ交わし、要は凧の家を後にした。

凧は要の姿が見えなくなるまでずっと見送っていた。

家に帰った要は、一つのチヨコを前にじっと考えていた。

そのチヨコにかかれた相手は『正一』。

問題は、要が正一の家を知らないことだった。

郵便で届けるにも住所を知らず、途方にくれていた。

と、その時だった。

「かくなぐめ」

白い霧とともに現れた銀。

彼の姿を見た瞬間に、要には名案（本人が思ってるだけ）を思いついた。

「ぎんクン、ちょこつとお願いが……」

いつもの目が笑っていないスマイル。

その表情を見て銀は、絶対にこのお願いには絶対に逆らえない、と感じていた。

「このチョコをさ、正一に届けてきて欲しいんだけど」

「あ、それだけ？」

「うん。お前の分のチョコも用意してあるからさ」

目の前でひらひらと揺れるチョコ。

「ありがたく頂戴します！」

それに向かって手を差し出すが、要はチョコを引っ込めてしまった。

「これは後払い。んじゃ、よろしくな」

「急いで行ってくるぜ！」

それだけ言うと、一瞬にして姿を消した銀。

しかし、十秒後には帰ってきた。

「はやっ!?!」

「オレを誰だと思っている? 神様だぞか・み・さ・ま！」

「あーはいはい。ほらチヨ」

「よっしやー!」

その日の夜。天界では何かをかじるような音が響き渡っていたとか。

23、 謎のちびっ子

「く〜っいいい天気だなあ」

オレは今、何となくで並盛を出て、知らない町をぶらっついていた。

ここがどこだかわからないまま、とりあえずぶらっつく。

冬空は綺麗に澄み渡っていた。

どこに行こうか、そんなことを考えていたとき、

「きゃあああ！！子供が轢かれる！！」

振り返ると、道路の真ん中で倒れている一人の少年と、

彼に迫る一台のトラック。

やばい！

周りにいる大人たちは誰も助けようとしなない。

「くそっ、偽善者共が！」

急いで走る。

どう考えても後十秒くらいでトラックは突っ込んでしまう。

オレがいる場所は、頑張ってもせいぜい一分。

どうする

どうする

どろろすればー！！

『そのためのブレスだろう』

フツと聞こえてきた銀の声。

そつか！その手があったかー！！

急いで脚力を上げる。

「頼む！間に合ってくれー！！」

いっけええええええー！！

キイイイイイツッ

いつだったか聞いた耳障りな音が、聞こえてきた。

そつと目を開ける。

オレの周りに人だかりができている。

また…死んだのか…？

「ケホツ…ケホツ…お兄ちゃん…？」

オレの腕の中にいたガキが動いた。

よかったな…無事だったか…

でも、悪いな…オレは…動けねーんだ…

気が付くと真っ白いところにいた。

銀のいる世界かな？

あれ？何か違う…

人の声が聞こえるし…ここは…

「お兄ちゃん！」

「お前は……」

そこにいたのはあのガキだった。

体中の痛みを堪えて何とか起き上がる。

ずっと気づかなかったが、ここは病院の一室らしい。

しかも個室。

更に部屋の中には、黒スーツを見に纏った男たちがいた。

その中の一人が近づいてきた。

「気分は大丈夫か？」

「へ？あ、ああ。あんたは一体……？」

「オレは。坊ちゃんを守ってくれたことを感謝する」

「えーつと確か……」

「ジッリヨネロのか？」

「坊ちゃんって、そのちびっ子か？」

「ああ。コスモ様って言ってな。俺達のボスの子供だ」

「あり？アリアに息子なんていたっけ？」

「まいつか。」

「ボスって、マフィアかなんかかったーの」

「！！ そつだ。」

オレたちはジツリヨネロファミリーって言うイタリアのマフィアだ。

本当は一般人とは関っちゃいけないんだが、坊ちゃんを助けてもらっただ。

「だが、あんたは怪我してたしな」

「あ！オレ治療費とかもってねー！！」

「心配すんな。オレ達が払ってやるよ」

「は！？え！？」

「って言うか、ここどの町？」

「まずは帰りたい。」

「あの、オレはもう大丈夫なんで帰ります」

「ほんとに大丈夫か？トラックの下敷きだったぞ？」

……よくオレは生きていたな。

「どっしてもって言うなら送ってくぜ」

「あ、ああ、あああ。どうも」

結局 に送られて家に帰った。

しかも、コスモがオレに懐いてしまい、しばらくの間面倒を見ることになってしまった。

「よろしくねお兄ちゃん！」

「コスモ、オレは要って言うんだ。

それに、オレは女なんだぜ？」

その瞬間、ジッリヨネロの皆が固まった。

この様子だと、全員オレが男だっと思ってたらしいな。

「ま、この際許すけどな」

「それじゃあ坊ちゃん、一ヶ月ぐらいしたら迎えに来る。

この人に迷惑かけんじゃねえぞ」

「分かってるよ、兄ちゃん」

あ、初めて二人以上で暮らすなオレ。

24、 雪合戦

みどりたなびくなみもりの

だういなくしょうなくなみがいい

「……………その歌好きか？」

「うん！」

今並中の校歌を歌っていたのはコスモ。

雲雀のように要の携帯の着メロが校歌なので、自然と覚えてしまった。

そして、気に入ったようで当然のように歌うことができる。

『みどりたなびくなみもりの』

あ、メール。

宛先：要

送り名：恭

内容：仕事がたまってるよ。

今すぐ学校に来て。

……今日は日曜だよな？

「かなねえ、どうしたの？」

「ああ、うん。どつやら仕事か……」

「僕も連れてって！」

「コスモも行きたいか？」

「うん！」

「ちょっと待ってる」

宛先：恭

送り名：要

内容：了解。

んで、学校についてきたいと言いつちびっ子がいるが
いいか？

送信つと。

『みどりくたな(ピッ)(』

この着メロ五月蠅い。

って言うか、返信早すぎ。。。

宛先：要

送り名：恭

内容：仕方ないね。

迷惑をかけないならいいよ。

「だ、そうだ。大人しくできるか？」

「大丈夫だよ、かなねえ」

よし、じゃあ行くか。

「霜月さん！？どうしてここに！？」

……今日って日曜日だよな。

「なんでお前らがいるんだよ……」

「悪いか、十代目たちと雪合戦やってんだよ」

「あつそ」

すっげー騒がしいけどよく恭が大人しくしてるな。

ま、いつか。

「コスモ〜行くぞ……」

ってあれ？」

ちよつと目を放した際に、コスモが見当たらなくなっていた。

『僕も混ぜて〜』

「っつておい〜」

いつの間にかコスモは雪合戦メンバーに混じっていた。

「……沢田」

「は、はい！」

「コスモが雪合戦やりたらしいから混ぜてやれ。

ただし！

怪我させたらぶっ飛ばすからな」

「わ、わかりました！！」

なんていうか、子供の好奇心って羨ましいよな。

まあ、オレにもあんな時代があったけど。

「ちょっと待て」

「ん？ああ、チビ介か。なんだ？」

「あのちびっ子誰だ？」

「知り合いの子供。しばらくの間面倒見を頼まれてんだ。」

オレは恭に呼び出し食らってるから、じゃあな」

遅れると不味いから駆け足で応接室に向かう。

ガチャッ

オレの机の上には山盛りの書類。

うわゝもうイジメの域だ。

「これ全部やれってか？」

「当たり前でしょ？」

ま、いつか。

ん、なんかさっきからこればっかだな。

コスモのことも気になるし、早く終わらせるとするか。

「そっいえば」

「ん？」

「君がいった子供、いないけど？」

「ああ。外で繰り広げられてる雪合戦に参加してるよ」

「雪合戦？」

え？それすら気づいてなかったの？

「そう……」

何か怪しいこと考えてない？

その笑みが不気味なんだけど。

「ちょっと様子見てくるよ」

「ん。いつてらー」

応接室を出て行く恭。

オレは書類を片付けながら窓から外の様子を見ていた。

どうやらコスモは沢田たちと同じグループになってるらしい。

フウ太と仲良くやってるし。

「はあ。メンドクせ」

見るのも飽きて、さっさと仕事を終わらせることにした。

しばらくして恭が戻ってきた。

それとほぼ同時に、外で爆発が起きた。

「爆発!？」

ちよっ コスモ!！」

おいおい、アイツに何かあったら不味いからな!?

慌てて外に飛び出すと、そこは色々とめちゃくちゃだった。

「コスモ!いるなら返事しろ!」

「かなねえ〜ここだよ〜」

かすかに聞こえたコスモの声。

周りを見渡すと、校庭の隅っこにコスモはいた。

「お前大丈夫だったか!？」

「うん!あのね、フウ太君が雪で壁を作ってくれてね、

だから、無事だったの!」

「そうか。」

…ありがとな、フウ太」

「いいよ別に。」

コスモ君は要姉が、最も大切にしている人ランキング2位だもんね」

そういうことはランキングする必要はないだろ！

ま、コスモを守ってくれたんだから、この際はいいか。

「コスモ、充分楽しんだか？」

「うん！すっごく楽しかったよ！」

「そっか。んじゃ、帰るか？」

「じゃあね、フウ太君！」

「さよならコスモ君」

数日後、なぜかコスモではなくオレが風邪を引いた。

25、 凧とコスモ 初のご対面

春が近づき、桜のつぼみが見えてきた頃、

一人の少女が朝の並盛町を歩いていた。

何度も何度も地図を確認しながら、確かに目的地に向かう。

そして、その歩みは一軒の前で止まった。

ピンポーン

インターホンが鳴り響く。

すると、家の中が騒がしくなり、しばらくして一人の少年が姿を現した。

「あ……」

見知らぬ少年に戸惑い、家を間違えたかと思った。

が、

「かなねえ、お客さんだよ！」

「客う？」

少年が家の中に声をかけると、中から聞き覚えのある声が返ってきた。

そして現れたエメラルドグリーンの髪を持つ、一人の少年、

いや、少女。

「あっ、」
「要」

「凧？おあつ凧じゃんか！何だよ、朝からどうしたんだ？」

いつもと変わらない笑顔。

会うのは一ヶ月ぶり。

「今日…暇だったら一緒に買い物に行こうと思って…」

「おう！いいぜ。」

支度してくっから待ってる

「ん？」

玄関に取り残された凧とコスモ。

どちらもだんまりで静寂がその場を支配していた。

「お姉ちゃん、かなねえのお友達？」

が、それを破ったのはコスモだった。

「え…うん。あなたは？」

「僕はコスモって言うの！先月から一ヶ月、かなねえのところに住んでるの」

「そっ…なの？」

「うん！」

しかし会話はそれっきりとなり、要が戻ってくるまで結局だんまりだった。

凧の顔が赤いのが恥ずかしさであるとは知らず、

要はただ頭上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「そうだ、コスモもついてくるか？」

「いいの？」

「ああ。な、風」

「うん。いいよ」

「やったーっ」

朝の七時、三人は少し霧のかかった道を歩き始めた。

「ぐはっ」

「要、大丈夫」

「ハハハ、オールオツケーさ……」

「笑顔が乾いてるけど…?」

もうすぐ正午なる時間帯。要はぶっ倒れていた。

その理由はとらふしゅ…

「かなねえ！僕ゲームセンターに行きたい！」

「あつ！かなねえあれ買って！」

「いいでしょー！」

「元氣すぎるコスモに振り回されているからである。

その元氣はどこから来るのか、一向に疲れる気配を見せないコスモ。

「要、ホントに大丈夫？」

「うう……」

風は内心、このまま要は過労死で死んでしまうのではないか、とか思っていた。

「どつして、あそこまで言うことを聞いてあげるの？」

「ははっ。

アイツは一ヶ月前にトラックに轢かれそうなところをオレが助けてやったやつでな

そんなに好かれちゃったみたいで、保護者？に

『一ヶ月預かってもらえないか』

って頼まれたんだ」

「……（また、何か無茶したんだ……）」

「それで、その一ヶ月の期間が今日で切れるんだ」

「今日？それって今日帰るってこと？」

「ああ

だからせめて、最後の日くらい思いつきり楽しんでもらおう

そう思って我が儘を全て聞き入れていた。

簡単に言えばお人よしだ。

要の人がよすぎることは、凧は良く知っている。

だから何も言わない子とにした。

「腹、減ってねえか？何かおごるぜ」

商店街の大時計が十二時をさした音を聞いて、要が口を開いた。

「……………いい」

「遠慮すんなって」

「……いい。」

でも、代わりに私においひさせて。」

「風？」

頑張っている要へのせめてものご褒美。

そう考えての提案だった。

「いいのか？」

「……」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

あちこちを駆け回るコスモを捕まえて、三人は近くのレストランへ

と入っていった。

「はぐはぐ」

「要？」

「かなねえ？」

何となく入ったイタリアンレストランの高さと、凧の所持金の高さに絶句。

凧の親が、社長と女優ということは知っていた物の、

そのすごさを改めて実感した要だった。

因みに、要のお金は全て銀のポケットマネー。

「コスモ……そろそろ」

「……そっかぁ、もうそんな時間か」

「凧、今日はこれでさよならだ」

「うん。今日はありがとう」

凧と別れた要とコスモは家に向かった。

家の前には既にジツリヨネロの車が止まっていた。

「ただいま」

「勝手に上がらせてもらってるぜ」

リビングにいたのは とその他諸々。

「いや、かまわねえよ。それより、コスモの迎え、だろ？」

「ああ。坊ちゃん、満足したか？」

「うん。かなねえが優しかったしね！」

「それじゃ、帰るぞ。ボスが心配する」

「そっか」

に手を引かれるコスモが一瞬寂しそうな顔をしたのを、要は見逃さなかった。

「コスモ」

車に乗り込むコスモに声をかける。

小さな体が振り向く。

「今度はオレがイタリアに遊びに行つてやるからな！」

その瞬間、少年の顔に笑顔が広がった。

「うん！待ってるよ！」

完全に車が見えなくなるまでずっと見送る要。

その目から一筋の涙がこぼれたのは誰も知らない。

26、 花見

桜舞う季節。

要は窓からその様子を見ていた。

「ハア〜」

柄に合わない(?)溜息。

それもそのはず。

先ほど雲雀からメールが届いた。

宛先：要

送り名：恭

内容：今日は花見日和だから、風紀委員で花見をすることになった。

いい場所とつてあるから九時になったら迎えに行くよ。

というもの。

本来ならば凧と行く予定だったのをドタキャンまでしたのだ。

機嫌が良いわけがない。

そして、あと三十秒で九時となる。

「28…27…26…25…」

時計を見ながらカウントを始める。

それに連れて遠くからバイクの音が近づいてくる。

「15…14…13…12…11…」

雲雀の姿が見えてくる。

「8……7……6……5……4……3……2……1……」

キィィッ

ドンピシャに到着した。

「しゃーねーな。いくか」

要は、窓を閉めると準備をして外に出た。

雲雀は、要が出てきた瞬間に、ヘルメットを投げた。

それをうまく受け取った要は雲雀の後ろにまたがった。

「なあ、いつも思うが

お前は何でヘルメットつけねーんだ？」

「別に。僕には必要ないからね」

「ふうん」

その後も気にせず、二人は静かに公園に向かって走っていった。

「騒がしいな」

「……そうだね。ただどあそこには見張りをつけてあるから」

『るせ』

『はがっ』

「ホントに大丈夫か？」

「いくよ」

なにやら騒がしいのでその方へ向かう。

そこにいたのは、

「ひつヒバリさん！それに霜月さん！？」

案の定、沢田たちだった。

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね

彼に追い払って貰っていたんだ」

ここで、風紀委員は群れに入らないのか、

などと質問したら終わりだ。

「だけど君は役に立たないね

後はいいよ、自分でやるから」

「い…委員長」

「弱虫は

土にかえれよ」

雲雀は震え上がる風紀委員をトンファーで殴った。

殴られた風紀委員は力なく吹っ飛ばされた。

「！ 仲間を」

沢田はそのことに驚く。

「見ての通り僕は人の上に立つのが苦手なよつでね

屍の上に立っている方が落ち着くよ」

その台詞に全員が、背筋が凍ったような感覚に襲われる。

それは要も例外ではないのだが、なんとというか、

肌寒いな〜としか考えてなかった。

「いやー絶景！絶景！

花見ってのはいいね

」

そんな時現れた声。

「つか〜〜〜

やだね

男ばっかつ！」

「Dr. シャマル！」

来たのはシャマルだった。

シャマルは要を見つけるとニヤニヤしながら近づいた。

「なんでー可愛い子いんじゃないん」

珍しく、要が女であると一発で当てた。

そして肩に手を置いた。

が、要の回し蹴りで簡単に吹っ飛んでしまった。

「女って分かってくれたのは嬉しいが、

その台詞は死への扉だぜ」

冷たい視線は雲雀のそれを超えていた。

「ちゃオツス。ヒバリ、霜月」

「あ、チビ介」

「赤ん坊、会えて嬉しいよ」

「オレ達も花見がしてーんだ」

そーですねー。花見なんて皆したいですよー。

なんて思っている要。

だが、あえて言わない。言ってもどつにもならないから。

「どーだヒバリ」

花見の場所を賭けてツナが勝負するといってるぞ」

「なんでオレの名前だすのー!!」

「ゲーム…」

「いいよ。どーせ皆潰すつもりだったしね」

勝負と聞いて、完全に笑顔の雲雀。

「じゃあ、君たちとそれぞれサシで勝負しよう」

僕と要の二人と一対一で勝負して、僕たちのどちらかが膝を付いたら負けを認めてここを譲るよ」

「オレは強制参加なのか……」

楽しそうな雲雀とは裏腹に、要は溜息まみれの一日となりそうだ。

頭をポリポリとかいて、ハア〜と溜息をついた。

「しゃーねーな、来いよ」

「んじゃ、オレが相手をするぜ」

「十代目、オレが最高の花見場所をゲットして見せますよ！」

立ち上がったのは、山本と獄寺。

第一回戦として、山本VS要・獄寺VS雲雀となった。

「テメーだけはぶつとばす!!」

最初に動いたのは獄寺。

ボムを持って雲雀に突っ込む。

それを見て雲雀は軽く鼻で笑った。

「いつもまつすぐだね。わかりやすい」

トンファーを振り下ろす。が、

獄寺は簡単によけてしまった。

そして、雲雀を囲むように放たれた大量のボム。

「新技 ボムプレッツ！！！」

「果てな」

豪快に爆発が起こる。

「へえ、あいつもやるようになったね」

「おっと、よそ見してる暇はねえぜ」

少し目を離れた瞬間に、要に刀が振り下ろされる。

要は、それを軽々とよける。

「それくらいじゃオレは倒せねえぞ、武」

「んなことあ、わかってるぜ」

「それに、アイツもな」

「？」

ブオオオオオ

爆風がかき消される。

そこから現れたのは、無傷の雲雀だった。

「なっ 無傷だと!?!」

「そういうこった」

ガッ

要に蹴りを入れられて、ふらついて膝を付いてしまった。

「ちっ」

「君も、二度と花見をできなくしてあげよう」

雲雀は勢いよくトンファーを振り下ろす。

それを避けるために屈んだ獄寺は膝を付いてしまった。

「次、来なよ」

「霜月さん、私が相手をするわ」

二回戦は和泉VS要、沢田VS雲雀というのが強制的にできた。

和泉はやる気マンマンだが、ツナは完全にビビり中。

「なっ」

「ツナ、お前がヒバリを倒すんだぞ」

「早く来なよ」

「お前もな、村上」

名前を呼ばれて、和泉は刀を取り出した。

雲雀は一瞬それを見て『あれ？自分が折らなかつたか？』

と思ったが、死ぬ気になったツナが来たためにそちらに集中を戻した。

「お言葉に甘えていくわ

水天逆巻け 捻花！」

「クスッ。オレには敵わないぜ」

「そんなことを言っていていられるのも今のうちよ

あなたの斬魄刀も見せてもらおうわ」

「ムリ」

余裕ぶっこきの要に切れたのか、和泉は槍となった武器を持って突っ込んでいった。

一度片手でクルクルと回し、要に切りかかる。

しかし、要は少しニヤリと笑っただけで動こうとしなかった。

「舐めないで！」

振り下ろされた槍は、要によって止められた。

武器ではなく、素手で。

「……」

「言ったる。お前じゃオレには勝てない」

和泉のお腹に平手が押し込まれる。

たったそれだけで和泉は後ろに吹っ飛ばされてしまった。

「恭くそっちはどうだ？」

クルリと雲雀の方を振り返る。

雲雀と対峙していた沢田は、武器がハタキだった。

「渋……ってかダサ……」

雲雀が渾身の一撃を振り下ろす。

ど
ん

「え……?」

倒れたのは、沢田ではなく雲雀だった。

「や、やりましたね十代目!」

「いや、オレは何も……」

「あいつだぞ」

リボンがさした先にいたのは、

「おーいて

ハンサムフェイスに傷が付いたらどーしてくれんだい」

シャマルだった。

彼は、要に蹴り飛ばされた瞬間に彼女に向かってトライデント・モスキートを発動。

が、微妙にずれ要ではなく雲雀がかかっていた。

「わりーけど超えてきた死線の数がちがうのよ」

「目標をはずしてるけどな」

「それを言うなって」

因みにコイツにかけた病気は桜に囲まれると立ってられない

“桜クラ病”だ」

それを聞いて要は雲雀に駆け寄った。

「もっしー大丈夫かー？」

「平気だよ……」

そうは言っているものの、フリフリである。

「約束は約束だ」

せいぜい桜を楽しむがいいさ」

「肩貸すぜ」

フリフリの雲雀を支えながら、要は公園を後にした。

「あの病気が治ったら、今度はオレが連れて行ってやるよ」

綺麗な桜の元にな」

27、 ついに二年生

あーついに二年になった要です。

今年も沢田たちと同じクラスで嬉しいのやら悲しいのやら……

既に傍観という気力も失せ、原作知識なんてこれっぽっちも残っていない。

だから今の気分は、静かに学校生活を楽しみたいところなんだが

騒がしいヤツが同じクラスになってしまった。

それは

「ロンシャン君!!」

無事二年進級おめでとう!」

オレの後ろでギャーギャー騒いでるこいつ等。

内藤ロンシャン。

去年は1 - Bだったらしく、相当なお調子者。

「メンドクせ。」

さっさと教室に行くか」

オレはやつらをガン無視で教室へ向かった。

今年のクラスは、去年一緒だった奴らが勢ぞろいしていた。

沢田・獄寺・武・笹川・黒川・村上

といったところ。それに内藤がプラスされている。

「さあ、席に着けよ」

あ、先公がきやがった。

「今日は担任に不幸があったので、

代理のリボ山です」

出た。クラスを一瞬で恐怖で支配する、リボンことリボ山。

こいつのせいで去年の授業参観は悲惨な目だったとか。

はっきり言ってオレは覚えてない。

「早速だが、今日はクラスの学級委員長を決めるぞ。

誰かいねーか」

オレは却下だな。メンドイし。

「はい！」

内藤ロンシャン君がいいと思います」

最初に手をあげたのは、細長い変なヤツ。

そーいえば、内藤と一緒にいた奴だな。

それに対抗してか、次に手を上げたのは獄寺。

「待ちな。」

学級委員長は10代目の方が適任だ。

オレは沢田さんを推薦する」

いづと思ったぜ。

するとさらに手を挙げる人物が一人。

「はいはい。

ウチは霜月さんがええと思うで〜」

誰だ！オレを推薦する関西人は！

声の主は、茶髪のセミロング少女。……誰？

「んじゃ、学級委員長をかけて三人で対決な」

「オレは下りるかな！？」

風紀委員も強制でやらされて、その上学級委員長なんてヤダかな！」

リボ山（）というかりボーン（）に止められる前に、教室を飛び出した。

すごい殺気が飛んできたが気にするもんか！

後々武に聞いたところ、内藤が勝利したらしい。

何でも、突然泣き出したとか。

言われてみれば、消え去った原作の中でそんなことがあったよーな。

ま、いつか。

それより、あの関西人は誰だったんだ？

明日から気をつけないと。

27、 ついに二年生（後書き）

最近何故か適当になっております。

早くバトリたいな〜とか考えてます。

因みにこの作者、感想が来ないとやる気が萎える馬鹿です。

28、 謎の少女現る（前書き）

グダグダです。

勘弁してください。

28、 謎の少女現る

二年生になって2日目

学校へと向かう要の足取りは重かった。

それもそのはずで、学校に行けば昨日の関西少女が来ること間違いないからだ。

だが、嫌でも学校に行かないと雲雀に咬み殺される羽目になる。

「くっそ〜最悪な気分だぜ……」

ブツブツと文句を言いながら教室の扉を開けた。

そして一歩踏み入れたときだった。

「おはような、霜月さん」

その少女は現れた。

要は、一度溜息をつくとその横を素通りして席に着いた。

が、その少女は席までくっついてきた。

「なあ、お前何？」

昨日から正直迷惑なんだが」

思い切って不満をぶつける。

しかし少女が取った反応は、予想外の物だった。

悲しむどころか、一瞬キョトンとして笑顔になった。

「何や、メーワクやったか。」

ウチは神原千鶴っちゅーんや。よろしゅーな」

「よろしくも何も、迷惑つつってんのに自己紹介するやつがいるか
！」

山本以上にノー天気そうな千鶴。

完全に関西人のノリだった。

「ウチな、去年1 - Bやったんけど、ロンシャンが嫌いなんや。

ほんで今年も同じクラスになったから成敗しちやる思つて霜月さを推薦さしてもらったんや」

「人を私情で利用すんな！つか、人の話し聞け！」

「利用やなんて人聞きの悪い。

それに、霜月さんは風紀委員なんやろ？

なら、人をまとめる力があるーおもったんや」

まるで要を信頼してるかのような言葉。

要は少し悪い気がしなかったり違ったり……

「けど、それはオレに付きまとう理由にはなってねえぜ。

それならそれで、縁は昨日切れたと思うんだがな」

「そや、それが本題や」

人差し指が、ビシッと要に向けられる。

「霜月さん、ウチと友達になってくれへん？」

その目は真剣そのものだった。

「は？オレが、お前の友達に？」

「そや。ええやろ？」

しばらく千鶴を見つめていた要だったが、プツと吹き出した。

結構真剣目に言った千鶴からしたらムカつくような行為だが、千鶴の真剣な目は変わらなかった。

「何がおかしいんや」

「いや、悪いな。オレを友達に言う発想が意外だったもんでな。

はははっこの世界にはオレとの友達志願者が結構いるもんだな」

「この世界？」

「いんや、こっちの話」

こつちの世界とはもちろんリボーンの世界、という意味。

前世では、この容姿のせいでそんな人が存在しなかったために

やはりリボーンの世界は新鮮だと感じられたのだった。

「そーだな。」

命の危険にさらされても大丈夫って言う覚悟があんならいいかな」

「何で命の危険にさらされるんや。自分、一般人やろ？」

「確かに一般人だけど、へんなヤツ（リボーン）がまとわりついてるんでな」

「おもしろい人間は大歓迎。スリリングなのもウチは好きやで」

千鶴のノリが半端ない。

因みに、彼女が生粋の関西人なのかは誰も知らない。

雲雀なら知っているかもしれないが。

「ま、いんじゃない？お前みたいな天然と付き合っちゃってもさ」

「おおきにな。そんなら、これから要って呼ばせてもらっつて」

「好きにしな。よければオレも千鶴って呼ばせてもらっつて」

リポーンの世界に来て変わったことがいくつもある。

その中に性格も入っている。

この世界は誰にでも同じように接する人が多い。

それは、あらゆる人に避けられてきた要の心を開くには充分すぎる環境。

自分だって人間だ、そう思わせてもらえるから。

だからこうやって友達も作れるようになった。

それを誰よりも喜んでいたのは

「よかったな、要」

最近出番の少ない、神様こと銀。

『出番が少ないって……言ったら終わりだよお……』

人間界で新たな友情が生まれた頃に、天界で泣く人物。

「お前の所為だから……！」

そして今日も幸せに過ぎていく（by 彩加）

29、 え、旅行？メンドイからパス

「霜月さん、霜月さんてば！」

「うるせえー！！」

朝から響く要の声。何故こんなことになったのかといつと……

始まりはツナ（と言っよりはリボン）の一言。

「ファミリー全員で旅行に行くぞ」

と言っもの。

面倒なことが嫌いな要からしたら、その旅行も面倒なことには分類される。

まあ、凧やコスモ、入江に千鶴が関係していたら分からないが。

いや、実際のところ千鶴は関係していた。

リポーンから要をおびき出すため、と誘われていたのだが、その意図に気づいた要はあっさり断った。

そこで、ツナが一緒に行こうと言って説得しているのが冒頭部分のこと。

「要え、一緒に行こうや。きつとおもしろいで」

「ふん。面白いなら面白いで楽しんでくれば？写メとかとって送ってくればそれで満足だし」

「そう言わずにさ、一緒に行かない？」

山本も霜月さんがいた方が楽しいって言ってたし」

「お前は黙れよ沢田。武がなんと言おうとオレは行かないし、

千鶴に言われても行かない。

せいぜい楽しんできな」

結局、誰からの説得にも折れなかった。

ツナは諦め、現時点でのメンバーを確認することに。

「えーっと、今行くなって決まってるのは…」

ツナ・獄寺・武・京子・ハル・奈々・リボン・千鶴・ビアンキ・
イーピン

と言ったところだ。

と、ここで何故突然旅行なんて話になったのか説明しよう。

奈々がお茶の懸賞葉書を出す

当選する。

南国バカンスの旅

自分を除く十人まで誘うことができる

今に至る

「まったく、どうせなら自分の友達でも誘えばいいのに……」

「何でオレ達まで……？」

「まーいーじゃねえか」

「……リボン。微妙なタイミングで現れないでよ」

「全くダメツナだな。霜月のことも旅行に誘えないなんて」

「あのなありボン。そもそも、ヒバリさんみたいに群れてるのを

嫌う霜月さんを誘うなんて

それ自体無謀なんだって」

「本当に無謀だと思うか？」

リボーンの意味ありげな言葉。

ツナは意味が分からず頭の上に？マークを出している。

「最近のアイツを見てなんとも思わないのか？」

「え？」

「知り合いの子供を連れていたり、二年になって珍しく友達も作ってる」

「あ、そういわれてみれば今までだったらありえないことだね」

「ま、断られちまったら仕方ねーけどな。」

あと一時間で出発だぞ。準備はできてんのか？」

「え！？あと一時間！？」

「ツナくん！！！」

遠くから呼ぶ声。そこには既に準備を終えたメンバーがいた。

一時間後、無事にメンバーを乗せたクルーザーは南のバカンスへと向かった。

30、 豪華客船だぜ

先刻港を出発したクルーザー“リボット号”は、穏やかな海を渡っていた。

嵐が来る気配もなし。天気は絶好調。

このクルーザーの本当の行く先を知っているのはリボーンのみ。。。

「いやあ、さつすが豪華客船やなあ。綺麗やし広々できるしでホンマにもつたいないわあ」

「霜月さん、そんなに旅行が嫌いなのかなあ……?」

「……………」

「あ……? 榊原さん? オレの顔になんか付いてますか?」

「あ、いや、ちがうんや。そのお……」

「要が来いひん理由ってそんなもんなんやろか?」

「え?」

千鶴の言った意味が理解できず、目を点にするツナ。

そして、すぐにハツとなって気を取り直した。

「理由って、どういふことですか？」

「まあ、ウチも今年であったばかりやし、細かいところまではわからへんで？」

けど、なんちゅーんやろなあ。

ウチが見た限りだと、どっちかって言うと要が嫌いなのは、旅とちごーて、ツナ、アンタなんちゃうか、って思うねん」

「!?!」

ツナは、一番気にしていたことをズバリ言われて、一気に落ち込んでしまった。

その様子を千鶴は、自分は悪くない、と言った感じで見つめてた。

「やっぱり、オレ嫌われてんのか…

薄々はそうかもって思ってたけど…

そんなに嫌われてたんだ……」

「ま、折角の豪華客船や。パーツと楽しもや

そや。要に写メ送つとかなアカンな」

千鶴は携帯を取り出してあちらこちらを撮影し始めた。

それを、要にメールで送る。

返信はすぐに帰ってきた。

『へー、随分と楽しんでるようで結構なことだ。

恭もどつかいっててオレ一人で書類片付けなきゃいけないから

ちゃんとして楽しんで来いよー』

「ツナ」

「なに?」

「さっきはゴメンな」

「いいよ。気にしてないから」

「いや、そーやない。」

要、風紀委員の仕事、全部押し付けられたんやって

「なっ!」

番外3、 不思議の国の要WW

これは、ツナたちが南国バカンスに行っているときのお話。

並盛で起きた小さな小さな事件。

けれど、後で重要になるのかもしれない。

要が巻き込まれた、ちょっとしたお話。

「つたく……」

なにが南国バカンスだ。ばかばかしい」

場所は、並中の応接室。

悪態をつきながらも、一人でせつせと書類を片付けている少年
否、少女は、

並中風紀委員長補佐、霜月要。

友達が南国バカンスに行き、どういうわけか、雲雀までいないとい
う、

ム力つく事態に陥っていた。

が、それでめげる要ではない。

というか寧ろ、雲雀がいないおかげか、そのスピードは早い。

「は〜。これが終わったら凧んどこにでも遊びにいこっかな〜」

その一言から十分後。彼女は見事に仕事を終わらせた。

まとめた書類を提出ボックスに入れ、応接室を出た。

その足取りは、軽い。よほど凧に会うのが楽しみなのだろう。

歩きながらポケットに手を突っ込み、凧とペアであったチョーカーを取り出す。

歩きから小走りになる。その状態でチョーカーをつけた。

と、そのときだった。

「その変なヤツ〜！危ないんだもんね！〜」

最初は誰を指しているのだろう、と思った要だったが、自分の事だと気づくのに、

三十秒もかからなかった。

しかし、その三十秒は、彼女を不幸に巻き込むには充分すぎる時間だった。

ドン、という衝撃。次いで来るめまいのような感覚。

気づけば、知らないところにいた。

日本ではないのか、周りにいる人の言葉を聞き取ることができない。

注意深く辺りを見回す。が、自分の状況を把握するのには、情報が足りなすぎた。

適当にふらふらと歩く。

と、そこに小さなリンゴの木があった。

その前で一生懸命気になるリンゴを取ろうとする一人の少年がいた。

歳は、かなり幼いように見えた。

なにせ、120cmの位置にあるリンゴに手が届かないのだから。

あまりに健気なので、要は横から、そっとリンゴを取って少年に渡した。

少年の方は、突然現れた人物に驚き、警戒した。

要はしゃがんで、少年と同じ目線にあわせた。

「そう警戒すんなよ。オレは怪しいやつじゃねえ。

ちよつとした迷子なんだ」

「……………」

「っていつても警戒するか……たはは」

苦笑しながら、要はもう一度リンゴの木に手を伸ばした。

リンゴを取った瞬間に、枝が引つ掛かりチョーカーが外れた。

少年は落ちていくチョーカーを目で追った。

しかし、要は気づかなかった。

「じっかじっかのリンゴのまじよな」

「……そうですね」

ようやく少年が口を開いた。

だが、まだ警戒しているようだった。

「あなたの名前はなんですか？何故、僕を手伝ったんですか？」

「オレは霜月要。なんで助けたかって言われるとなあ……
なんでだろな」

「あなたはマフィアの人なのですか？」

「マフィア……か。オレはそんなものに興味はない。

って、なんでそんなこと聞くんだった？」

「いえ……別に」

少年の表情に翳りが見えた。

あ、これは深読みしないほうがいいな、と直感的に感じた。

「お前の名前ってなんだ？」

「僕の……名前ですか？」

「ああ。オレも名乗ったんだ。そっちも名乗らなきゃフェアじゃないぜ」

「……そうですね。僕の名前はる」

その時、また同じ感覚に襲われた。ここに来たときと同じ。

そして気づけば見慣れた並盛の町だった。

相変わらず何がなんだか分からない。

が、要にとってあの少年も“友達”にリストアップされた。

藍色の髪が印象的な少年。

ふと、大切な物が無くなっていることに気がついた。

大切なチョーカーが。

落としてしまった。あの、不思議な世界に。

「僕の名はろ

」

そこまで言ったときだった。目の前から人が消えた。

さっきまであった印象的なエメラルドグリーンの髪はどこにも見当たらなかった。

少年は、今までのことは夢だったんじゃないか、と思った。

しかし、彼女が確かにここにいた証拠があった。

ハートのチョーカー。

リンゴを取るときに落ちてしまった一つのアクセサリ。

少年はそれを拾うと、そのチョーカーがさっきまでいた女性のように、一言呟いた。

「僕の名は、六道骸、ですよ」

クフフ、と小さく笑うと、少年　骸はチョーカーを服のポケットにしまった。

またいつか、会えることを信じて。

31、 南国バカンス（前書き）

番外編を一話はさんでしまった・・・

31、 南国バカンス

「ついたーっ」

船に揺られて丸一日。

とうとう、ツナ一行を乗せた豪華客船は南国バカンスへと到着した。

「ツナ、お前は入島報告に行け」

「入島報告？なんで？」

「ここは一般人は来れねえスゲー所だからな」

「なになに？何かおもろいことでもあるんか？」

「ここはマフィアランドだ」

「な！？」

「マ

「ファイ

「ア

「ラ

「ン

「ド

「!？」

なぜか一人一文字ずつ言った。

マフィアランドとは、沢山のマフィアがお金を出し合い作られた、

マフィアのための楽園である。

そもそも、豪華客船の名前がリボーンを模した“リボット号”である時点で気づくべきである。

「な、なんでそんなところに!？」

お茶の懸賞じゃなかったのかよ!!!」

「あれはカモフラージュだ。

本当はオレが入れた招待状だぞ。ということで、ホレ

これが招待状だ。

これを受付に見せれば簡単に報告は終わる」

ツナは、リボーンから招待状を受け取ると、渋々というオーラを振りまきながら

受付へと向かった。

「あ、そや。写メ」

カシヤリ。

マフィアと聞いてものんきな千鶴だった。

「さて、私達はバカンスを楽しみましょう」

「「「「はい」」」」

奈々率いる女性陣はさっさとバカンスを楽しみにいった。

残された獄寺と山本とリボン。

「ツナが戻ってくるまで待つか？」

「そうだな。十代目を置いて楽しむなんてできねえしな」

「もうそろそろ戻ってくるはずだぞ」

『おい！』

「お、戻ってきたぜ」

「ハア：ハア：ごめんね遅くなって。それじゃオレ達もいこっか」

「ああ」

「はい！」

なぜカリボーンだけは謎の笑みを浮かべていた。

遊びに遊びまくった皆。

千鶴だけはせわしなく要にメールを送っていたが。

気づけばもう日付が変わり、帰る時間となっていた。

長いようで短かったバカンス。

ま、本編で話したバカンスの期間はとてつもなく短い。

そんなこんなで楽しかったバカンスは幕を閉じた。

32、 そうだイタリアに行こう

ども。

毎度毎度行動不明の要だ。

今現在、オレはイタリアにいる。

理由はコスモに会うため、とジツリヨネロファミリーにご挨拶だ。

地図はいつだったか、コスモがこっそりくれた。

“ ホントは秘密なんだけどね ”

と、いたずらっぽく言いながら渡してきた。

それを頼りにイタリアの町を歩いている。

“アジトは聖地と言われる森にある”

と書かれているが、正直さっぱりすっぱり意味不明。

仕方なく近くを通ったご老人をつかまえて、道を聞くことにした。

「Dove detta una foresta la
bibbia per essere?」

「Cillo ese mio mi rivolgo al
vittorio al melo nel se io mi ri
volgo al diritto al melo nel
uaggo dove io presi di ritto que
sto corso」

「Grazie」

ふう。少しはイタリア語を勉強しておいてよかったな。

しかしリンゴの木か。

あの藍色の髪の子供にあったのもリンゴの木だったな。

ま、今はそれはおいといて。

行くか。

なんだ？心なしか見たことのある風景だな。

って言うか絶対にここだろ。

言われたりんごの木は、完全にアイツとであった場所だった。

小さかった背は三メートルほどになっていた。

結構成長してるもんだな。

確かここでペンダントを落としたんだが……

あるわけないか。

えーと、ここを右に曲がって行くのか。

「あ、あれか」

遠くに（と言うほど遠くないが）森が見えた。

もうすぐコスモたちに会えるな。

思ったよりも森は深かった。

けど、コスモに貰った地図のおかげで迷うことはなかった。

しばらくして、人の気配がした。

振り返るとそこにはオレに向けて銃を向ける男達。

「そこのお前、動くな！」

気付けば包囲済み。

「オレは怪しいもんじゃねーよ」

両手をひらひらさせて武器を持っていないことを示す。

「ただ、ジツリヨネロの皆さんに会いにきたただだって。

ああそつだ。 に話せば分かるよ」

オレが の名前を出したことで、周囲に動揺が走った。

「貴様、どこのファミリーのもんだ」

男の一人が聞いてきた。

「オレはどこのファミリーでもないぜ。無所属だ。」

てか、そもそもマフィアじゃねえ」

「それじゃあ何故ジツリヨネ口を知っている？」

「オレは の知り合いだったの。ついでにコスモともな」

周囲がざわつき始めた。

なんと言っか、今更ながらコスモの名前は出しちゃいけない気がした。

何故か。

さっきがパンパなく痛い。

オレは心の中で銀を呼んだ。

『銀、ヘルプ！こいつらをどーにか説得できねーかな』

『えーメンドイ』

『キサマ、それでも神様か!?!』

『つか折角ブレスあんだから使えよな。』

『それじゃただの宝の持ち腐れだぜ?』

『え、これってそこまで便利だったのか?』

『まー、物を作り出す以外だったら、お前が望む限りなんでもできるぜ』

『なーる』

『なーる、じゃねえよ!気付いてなかったのか!?!』

『んじゃお前は不要ってことで。サンキュ』

『不要!?!ちよと待て!ふよっ(ブチッ)』

心の会話、強制終了。

さてと、んじやいっちょテレパシーでもやってみるか。

あー戦闘以外で初めて使うわー。

『あーあーテストス。マイクのテストちゅー。』

ー聞こえたら返事よろしく』

『よろしくって、誰だ!』

『おー聞こえてくれたか。ちっす、要だぜ』

『な!要!?!』

随分と驚いてるご様子で。

ま、そりゃそうだな。突然声だけ聞こえてきたらな。

『今さ、ジツリヨネロのアジト前にいんだけどさ、見張りに絡まれてんの。』

の知り合いって言っても聞いてくんなくて。

なんとかできね?』

『できなくないが、アポも取らずに来たお前が悪い。』

待ってる、すぐ行く』

『おっサンキュー』

これでオケ。

あとは 来るのを待つのみ。

「んぐぐー」

「動くな!」

あ、あまりにほっとしたもんで今がやばいって忘れかけてた。

さーて、あと何秒で来るかな

「銃をさげる！」

一秒できた。早っ

「早かったなあ」

「当たり前だ。」

お前達、こいつはオレの知り合いで坊ちゃんの命の恩人だ。

銃をさげる」

の一言で全員が銃をさげた。

グッジョブ。

「迷惑かけたな。アジトはすぐそこだ。ついて来い」

「了解」

こうして一難去ったオレは、
に連れられジツリヨネロファミリーの
のアジトへ足を踏み入れた。

32、 そうだイタリアに行こう（後書き）

作中に出て来たイタリア語の翻訳。

「聖なる森にはどう行けば良いですか？」

「この道をまっすぐ行ってリンゴの木を右に曲がればありますよ」

「ありがとう」

恐らくこの日本語で訳しても同じのは出ないと思う…

33、 ジッリョネロ

「おおくやっぱマフィアのアジトってでかいなあ」

「お前はガキか！」

アジト内に入ったはいいが、あまりに立派なので感嘆の声を漏らす要。

そんな要を半ば引きずるようにして、 は彼女を客間に連れて行った。

「ボスを呼んでくるからここで待ってる」

そういつて が出て行ったことにすら気付かないほどだった。

コスモに突進されるまで完全に意識がぶっ飛んでいた。

「かなねえっ！」

どすっ

「うわっ！？」

「久しぶり、かなねえ」

ようやく気付いた要の目の前にあるのは、満面の笑みのコスモの顔だった。

「おう、久しぶりだなコスモ。元気にしてたか？」

「うんー！」

コスモの頭を撫でると、ネコのように目を細めて喜んだ。

「あなたが霜月要さんね？」

「はい？」

名前を呼ばれて振り返ると、入り口に一人の女性が立っていた。

「私はアリア。コスモの母親であり、ここジッリヨネロファミリーのボスをしているの」

アリアはテーブルを挟んで要の向かい側の椅子に座った。

それと同時に が紅茶を持ってきた。

アリアは紅茶を一口飲むと要に微笑みかけた。

「先日はコスモを助けてくれてありがとう。この子好奇心旺盛すぎていつも危険な目に遭ってしまふの。護衛をつけてもまるでダメ。監視の目をかいくぐっては危険な目に遭う」

視線がコスモに向く。つられて要も彼を見る。

コスモは、紅茶をアチアチいいながら少しずつ飲んでいた。

「やコスモから話は聞きました。コスモの土産話なんて一週間もかかるくらいで」

「いえ、オレはただ目の前で人が死ぬのを見たくないだけですから。

それにコスモの場合、昔のオレを思い出すんですよ。

好奇心旺盛でなんにでも挑戦したがるチャレンジャー。親によく怒られましたね」

一口紅茶を飲む。

「要、と呼んでいいかしら?」

「はい」

「失礼かもだけれど、あなたの両親は？」

「瞬ドキリとする。」

カップを持つ手が僅かに震える。

「オレの親は、オレが小さいときに殺されました。強盗殺人です」

アリアは、ハツとなって顔を上げた。

要の声に憎しみが籠っているのに気が付いたからだ。

「ごめんなさい。酷いことを聞いてしまったようね」

「いえ。いいんです。過ぎたことですから」

要は涙を堪えるように唇を噛んだ。

「かなねえ、どうしたの？」

いつの間にか、コスモが顔を覗き込んでいた。

今自分はどんな顔をしているだろうか。

泣いているのか、怒っているのか。それともまた別か。

「大丈夫だ。大丈夫」

できる限り笑顔を作った。

“大丈夫”は自分に向けた言葉だった。

今更過去を振り返ったって何にもならない。

今を生きてるんだから未来を見なければいけない。

「要」

呼ばれて顔を上げる。

「要。私はあなたの事情を知らない。それでも力になってあげたい。

コスモを助けてくれた時点であなただは私達のファミリー。

涙を堪えないで。辛くなったらいつでも頼ってね?」

アリアは優しく要を抱いた。

要は何かを吹っ切れたように涙が溢れてきた。

涙は止まるところを知らず、次から次へと溢れ出てきた。

要は、親友を失って以来、初めて泣いた。

「今日はありがとうございました」

日は沈んで当たりは闇が包んでいた。

「本当にいいの？もうあたりは暗いし、泊まっていけばいいのに」

「いえ、いいんです」

「泊まっていけばいいのに」

目をウルウルさせながら言ってくるコスモを、要は優しく撫でた。

「ゴメンなコスモ。明日は学校だし、行かないと五月蠅い奴がいるんだ」

「ぞあんねえくん」

謎にくねくねしながら言うコスモを見て、アリアと要は笑った。

笑われると嬉しいのか、コスモは更にくねくねした。

「またそのうち遊びに来るよ」

「本当!?!」

「ああ。本当だ。」

「いいですか?アリアさん」

「ええ、もちろん」

要の質問にアリアは微笑んで返した。

要も微笑み返す。

「それじゃ、オレ帰ります!」

「かなねえバイバイ!」

こうして要の日帰りイタリア旅行は幕を閉じた。

34、襲撃の犯人は黒曜生！？

「ぎゃあああああああああ……！！……！！……！！」

夜の並盛に断末魔が響いていた。

「要、この事件どう思う？」

「この事件ねえ。オレ達風紀委員に恨みでもある奴なんじゃねえの？」

要のぶつきらぼうな返事に、雲雀はムツとする。

いや、返事ではなく、人の話を聞いてないことにムツとしていた。

「君、話聞いてた？被害者は風紀委員以外にもいるんだよ。」

例えば、君のクラスにいる笹川京子の兄・笹川了平とかね」

「あ、アイツやられてんだ」

その時、ずっと他の風紀委員と連絡を取っていた草壁が近づいてきた。

そして雲雀の耳元で何かをささやくと、また去っていった。

雲雀は少し考え込んで、要を睨んだ。

「おい、何故オレを睨む！？」

「フン。要、逝くよ」

「いく！？いくってどこに！？ってか漢字が違うぞ！？」

「五月蠅い。行くのはこのいたずらの犯人がいるところだよ」

なんでそんなことも分からない。

確かに雲雀の目はそう言っていた。

「いやいや、それ以前に敵の正体知ってたのかよ!？」

要の台詞を無視して、雲雀は歩き始めた。

要は置いていかれないように早歩きでついて行った。

「ちよっ、恭！置いてくなよ!！」

「(スタスタスタ)」

「無視かよ!？んのお、ヒバリンって呼ぶぞゴルァ!！」

「咬み殺す(ヒュッ)(」

「うおっ！（ピヨーン）」

そんなこんなで戦闘をしながら向かうべき場所に向かった二人だった。

そして、歩き始めて（戦闘しながら）十分前後。

着いたのは黒曜ヘルシーランドだった。

「え？ここって黒曜だよな？」

「そうだけど。それがなに？」

「ここに犯人がいると？」

「そうだけど何？」

「（黒曜か……。あゝムリ）」

悪い、オレ用事ができた。じゃな！」

雲雀に有無を言わさぬ速さで、要は全速疾走で消えた。

言うまでもなく、雲雀は彼女をジト目で見ていた。

なんと言つか、怖い。当たり前だけど。

所変わって逃げた要。

「あゝなんでこうなるかな」

携帯を取り出すと、ものすごい速さで番号をプッシュした。

ブブブブブブブブブブ 10の間0.2秒

ブルルルル

『はい、もしもし』

「おっ尻。突然悪いな。ちょっと聞きたいことがあるんだが」

『うん。いいよ』

優しい子やなあ。

こんな朝早くなのに電話に答えてくれるなんて。

オレはいい親友を持ったなあ。

「でさ、風って黒曜中に通ってるよな？」

『うん。それがどうかしたの？』

「最近変わったことないか？」

『変わったこと？』

電話の向こうで考える声が聞こえる。

そして、小さくあつと聞こえた。

『そういえば、三年生に帰国子女が来たって。』

『それでその人たちが、不良の人たちを懲らしめて、その頂点に立
ったって』

「そいつらか！名前は分かるか！？」

『うん。確か、六道骸だった気がする』

六道…骸…？

聞いたことあるな。でも、誰だっけ？

今度は要がうーんと考え込んだ。

『要？大丈夫？』

「ん、ああ。授業の時間なのに電話して悪かったな」

『うっん。その事件があったから、最近自習が多いの。』

要の声が聞けてよかった』

「そ、そっか。じゃあな。また今度」

電話を切つてふう、とため息をつく。

胸元にそつと手を置く。今はない宝物を包むように。

凧とお揃いでかったペンダント。

よく分からない世界に行った際に落としてきてしまった。

凧には言っていない。言えない。“失くした”だなんて。

「あーもうっ。むしゃくしゃするな、オイー！」

要は気づかなかった。

後ろにずっとつけている人物がいることに。

要を追っていた人物は、彼女に向かって走り出した。

ۛۛۛۛ

「クフフフ。並盛最強といわれた男がこの程度ですか」

一人の少年の足元には雲雀が倒れていた。

雲雀はピクリとも動かない。

少年は一枚の紙を取り出した。

そこには人の名前と、番号が書いてあった。

「まさか、一位があの人とはね……」。

またあえて嬉しいですよ。

霜月要さん「」

クフフ、と笑う少年の手には、ハートのペンダントが握られていた。

34、襲撃の犯人は黒曜生！？（後書き）

よく分かんないので、凧は黒曜中ってことにしました。

35、 10年ぶり?の再会

並盛商店街を放浪する要の後ろを一人の人物がつけていた。

しかし、要は全く気付かない。

そしてその人物は、突然走り出した。

尋常ではない速さで走り、ありえないスピードで腕を振り上げて

「なんのようだ」

要によって止められた。

要は腕を?んだまま振り返った。

「ゲッ。気付かれてた...?」

その人物　　ワイルドな少年は、慌てて？まれた腕を振り払った。

振り払われても尚、要はその少年を睨みつけた。

「お前、甘い匂い漂いすぎなんだよ。尾行に向いてねえぞ」

「うるへー！オイお前！大人しくオレに捕まるびよん！」

「…びよん…って…お前、バカか？」

「黙るびよん！！」

いい加減、睨みが哀れみの冷たい目に変わった要だった。

「もういい！大人しくオレに捕まって骸さんに会えびよん！！」

「ああ？誰だよ骸って」

「いいから来るびょん!!」

少年は、あまりにも要が話を聞かないのでヒステリックに陥りかけてた。

しかし、そうならばなるほど要の哀れみの目は強くなっていった。

「まあ、とりあえず落ち着いてもらえるか？そのヒステリックな声が頭に響くんだ」

「ち……っ」

「んで、お前は誰だ。その骸つてやつは、何のためにオレを拉致ろうとしてんだ」

「オレは城島犬だびょん。骸さんの目的はオレも知らないびょん。ただ『霜月要を連れて来い』って」

随分と正直な人間ですなあ。

はっきり言って敵に自分の事話す人、いないでしょ。

「ま、恭もいることだし、行ってやってもいいかな？そんなじゃ犬いぬ、案内してくれ」

「犬いぬじゃねーびよん!!」

「骸さん、連れてきました」

帰宅を告げる犬の声。

心なしか、声が疲れきっている。

「おやおや。人一人連れてくるだけなのに随分と大変だったようで

すね

「聞いてくださいよ骸さん。コイツ、ずっとオレのことバカにしてくるんれすよ」

「クハッ。どうやら変わらない方のようだ。それで、どこにいるんですか？」

「すぐそこです。アホ女！さっさと入ってくるびょん！！」

ドガッ

「誰がアホ女だって〜？」

入り口の扉を破壊して要が入ってきた。

完全にアホ呼ばわりされたことにキレていた。

要は入ってくるなり犬を蹴飛ばした。

犬はそのまま部屋を出て行き、要は骸を睨みつけた。

「んで、オレに何のようだ」

「クフフ。久しぶりですね、霜月要さん」

「……何でオレを知っている？」

「名前を出しても分かってくれないでしょう。これを返しますよ」

骸は、要に向かってあるものを投げた。

要はそれをキャッチする。

「……これは……」

それは、ハートのペンダントだった。

要からしたら買ってから一年も経っていないのだが、ペンダントは古ぼけていた。

「あなたを探すのに苦労しましたよ。潰したマフィアの情報網を持つてしてもあなたの居場所を突き止めることはできなかったのですから」

要が行った十年前の世界。

アレは10年バズーカの故障によっていった物であり、実際の十年前には要は前の世界で暮らしている。

普通に考えればそうなのだが、要が転生者であることは誰も知らず、骸もまた然り。

会えもしない十年間、骸はこれを返そうと、一生懸命要を探していたのだ。

「お前…あの時のリンゴのガキか…」

「六道骸ですよ」

「そうか…。ありがとな、骸」

「礼を言うのは僕の方ですよ。あの時のお礼をまだ言っていないか
らね」

「ありがとうございました。」

「そういつて骸はクフフと笑った。」

「要もクスリと笑った。」

「なあ骸。一つ、いいか」

「なんですか？」

「お願いがあるんだ」

「内容次第ですが」

「実は

」

36、 ……来るの早くね？by要

「んで、今んとこどうなんだ骸」

「そうですね、犬とボンゴレが接触したようですね」

「そうか」

要は、骸と一緒にいた。

とは言っても、同じ部屋にいただけで、骸とはかなり離れたソファに寝転がっている。

「しかし、いいのですか？こんな仲間を裏切ってしまうようなこと」

「いいんだよ。つか裏切ってねえし。そもそもオレは奴等の仲間じゃねえからな」

仰向けになり、天井をみつめる。

自然とついさっきの会話が思い出される。

「オレが頼みたいのは、ここにいてもいいか、と言うことだ」

「それは頼みではなくお願いではないですか？」

「ん？まあそうだな」

「クフフ。僕がかまいませんよ。それに、もうすぐ僕が呼んだ脱獄仲間も来ることでしょう」

「脱獄う？……何やってんだか」

骸の言葉に要は呆れた顔をする。

それを見て、骸はまたクフフと笑った。

「色々と事情がありました」

「ま、話したくなきゃいいぜ。それほどの仲ってワケでもねえしな」

「いいですよ。後々に教えましょう」

今度は二人で、小さく笑った。

「さくって骸ちゃん。来てあげたわよ」

回想から戻ってくると、突然女の声がした。

ソファから身を乗り出して見ると、黒曜の制服を着た集団がいた。

今の声は、クラリネットを持った女子らしい。

「おや、援軍が来たようですね」

「……来るの早くね？」

「誰ソイツ」

要に気付いた女子が骸に聞いた。

「彼女は霜月要。僕の古き友人ですよ」

「ふん。あたしはM・M。っていうか、あんたボンゴレ？」

「違う」

「ならいいわ」

M・Mは要がボンゴレでないと知ると、握手を申し出た。

要も、相手に敵意がないと知ると、握手をした。

「あんた、私達の仲間ね」

「……あ、そうっ？」

何故か笑顔で言ってきたM・Mに呆れ顔になった要だった。

番外4、 出会いと別れ（前書き）

個人的気分で、微妙ですがここに突っ込んでしまいました。。。

番外編は基本的には10話毎にしてるのですが、ホントに個人的理由です。

正直に言うと、ネタが思いついて「忘れないうちに!!」「って感じっスねww

番外4、 出会いと別れ

夢を見た。

とても懐かしい夢を。

オレがまだ『私』だった頃の夢を。

それは、たった一人の親友との出会いと別れを記した

辛く苦しい記憶。

私は霜月要。

髪の毛は綺麗な緑色。瞳も似たような感じ。

誰からも嫌われた存在。

お父さんとお母さんは小さい頃……今も小さいけど……に強盗に入
った人に殺された。

今は、施設に入っている。

親を持たない人、事情があって親と暮らせない人、

そんな人ばかりが暮らしている施設で彼女とであった。

「私は高城彩加。よろしくね」

初めてそう言われたとき、正直何を言っているのか分からなかった。

どうして笑顔で話しかけているのだろうか。

そういう経験のない私にはさっぱり理解ができない。

「私は霜月要」

とりあえず名前は言った。

お母さんに、相手が名乗ったら自分も名乗りなさいとよく言われたから。

私が名前を言うと、彼女はニツコリと笑顔になった。

「そっか。要ちゃん、私と友達になって」

友達……？

それは何？

いつもいろんな人が集まって、集団を作ってるあれ？

そういう普通のことさえ知らなかった。

「友達なんて、イラナイ。私は一人で充分。集団はキライ。皆私をイジめるから」

そうだ。私にあんな集団は必要ない。

どうせ、この容姿を理由にバカにされて、辛い日々を過ごすだけなんだ。

私はそう思っていた。

でも、彼女は違った。

「私はあなたのことをイジメたりなんかしないよ？だって、その髪とかキレイだもん」

髪がキレイ。そんなことを言ったのはお母さん以来だった。

彼女となら、もしかしたら生きていけるかもしれない。

私の中で、生まれて初めての感情が芽生えた。

これが『友情』というものなのかもしれない。

「うん。ありがとう。彩加ちゃん」

私と彼女が打ち解けるのはとても速かった。

仲が良くなるにつれて、私の中にはある疑問が出て来た。

それは、『どうして彩加がここにいるのか』というものだった。

でもそれは、私達の中を裂く引き金になりそうで、怖くて聞けなかった。

そんなある日、彩加は言った。

「私ね、生まれたばかりの時に両親を亡くしちゃったの」

ずっと私が聞きたかった話だった。

彩加は続けた。

「お母さんは、私を身ごもる前から病気にかかってね、本当は私を産んじやいけなかったの。もし私を産んでしまったら、死んじやうかもだったから。でも、お母さんは私を産んだ。そして死んじやった」

「それじゃあ、彩加ちゃんはお母さんを知らないの？」

「お母さんだけじゃないよ。お父さんも。お父さんは、お母さんのことが大好きだった。だから、お母さんが死んじゃった数日後、お父さんは生まれたばかりの私を置いて、毒を飲んで自殺したの。遺書にたった一言『お前を呪う』とだけ残して。このことはね、私が生まれた病院の人から聞いた話なの」

私の理解を超える話だった。

正直何を言っているのか分からなかったけど、これだけは分かった。

彩加ちゃんは、自分が生まれたことを後悔している。

何て言えばいいのか分からなかった。

私も自分が生まれたことに対して後悔していた。

私の容姿がおかしいせいで、私を可愛がってくれていたお母さんやお父さんを苦しめてしまった。

二人が死んでしまったあと、私は『一人になる』ことで、後悔を押し

し殺していた。

だから、何を言えればいいのか何も分からなかった。

「彩加ちゃん……」

気付けば私は泣いていた。

何で泣いてるのだろう。

理由は分からないのに、ただ涙が流れていた。

それから数日、私達の仲は更に親しくなっていた。

『ちゃん』が取れて、『要』と『彩加』で呼び合うほどに。

そんなある日、七夕がやって来た。

織姫様と彦星様が年に一回だけ会うことができる日。

空は青く晴れ渡っていた。

この日、何故か彩加はソワソワしていた。

それもそのはずで、その日の夜、彩加からプレゼントがあった。

十字架のチョコレートだった。

十字架の部分には青くキラキラした石がたくさんはめ込まれていた。

私は、何も買っていない。

そのことを伝えると彩加は言った。

「要にはいっぱいもらったよ。出会ってからたくさんの思い出し！」

それは私も同じこと。

だから尚更何かあげたかった。

夜中、こっそり施設を抜け出してプレゼントを買った。

何もいい物が思いつかなくて、やっぱりチョコレートになってしまった。

彩加がくれたのと同じ、十字架のチョコレート。

ただ、私のと違って、赤い石がはめ込まれていた。

朝起きたときにプレゼントすると、喜んでもらったのと同時に、説教された。

施設を抜け出したとき、彩加は気づいていたらしかった。

だから、思いっきり怒られた。

でも、私はそれでも良かった。

彩加と親友である証を手に入れたのだから。

あの時、どうしてもあのような運命になったのか、今考えても分からない。

どうして、彩加が死ななくてはいけなかったのか。

その日、私と彩加は二人で出かけていた。

目的はなんだったんだろうか。

今となっては思い出すことはできない。

けれど、その行動が悲劇を引き起こすなんて考えても見なかった。

車通りの多い交差点。

信号が青になるのを待って横断歩道を渡る私達。

その時だった。

キイイイイイッ

耳障りな音とともに、誰かに引っ張られる感覚、そして、何かかぶつかる鈍い感覚があった。

時間が止まったかのように思えた景色の中で私が見たのは、

私達に突っ込んでくるトレーラーの姿だった。

気が付くとそこは病院だった。

頭がとても痛く、意識が朦朧としていた。

だんだん意識がハッキリしていくうちに、意識を失う前の光景が浮かんできた。

突っ込んでくるトレーラー。

私をかばおうと腕を引っ張った彩加。

自分とともに撥ねられた親友。

自分と親友の血でまみれた私。

記憶が蘇るのと同時に、私は耐え難い恐怖に襲われた。

「彩加！彩加あ！！！」

狂ったように叫ぶ。

それに気付いた大人が、私をどこかへ連れて行った。

そこには彩加がいた。

ベッドに横たわり、顔に白い布を被せられた彩加が。

その光景に見覚えがあった。

両親が死んだときと同じ……………

「さ…いか…？ウソ……………」

信じられなかった。

まさか、彩加は……………

「イヤアツ！ウソだよね？ウソだといって！！起きてよ、ねえ！目を覚ましてよ彩加あつ！！！」

どうして……どうして大切な人は皆私より先に死んじゃうの！？

私は、本当に死神なの！？

彩加は、私をかばって死んだ。

私さえいなければ、彩加は死なずに済んだのにッッ。

「彩加アアアアアツッ！！！！！」

彩加が死ぬときまでつけていたチョーカーは、血で真っ赤に染まっていた。

また私は一人で生きていく。

あなたのことは忘れないよ、彩加。

私の永遠の親友^{ヒロコ}。

37、もしもの時ってどんなときだよロノ

「犬がやられました」

「…マジか」

骸からの訃報(?)。

一同に小さく緊張が走った。

そしてM・Mがゆっくり立ち上がった。

「それじゃ、どんな奴か見てくるわ。骸ちゃん、仕事が終わったらちゃんと約束果たしてよね」

「クフフ。分かっていますよ」

「気をつけるよ。あいつ等、結構バカだから」

「言われなくても分かってるわ」

クラリネットをしっかりと持つと、M・Mは部屋から出て行った。

要は、足早に消えていった彼女を不思議そうにみつめていた。

「なあ、骸」

「なんですか？」

「あいつ、顔赤くなかったか？」

「知りませんよ」

どうでもいいことを気にする要だった。

「それよりも要、これを」

ふと、骸が何かを差し出した。

受け取ると、それはイヤフォンだった。

「それは僕らとだけ繋がる無線です。とりあえずつけて置いてください」

「ああ。わかった」

要は言われるがままに手早くイヤフォンを耳につけた。

少しノイズが入った後、M・Mの声が聞こえてきた。

『それにしてもマフィアのくせにみすばらしい格好してんのね』

「どつちらM・Mが交戦を始めたようですね」

「そうだな」

そう言ったきり要は黙ってしまった。

戦いの様子を聞いているのか、それとも何も考えていないのか、誰にも分からない。

ただ、表情に少し翳りが見えたのは確かだった。

「どうしたのですか要？」

「っえ？あ、ああ。何でもない。少し考え事を、な」

「何かあるなら言ってくれて構いませんよ。僕たちは仲間ですから」

骸がそういうと、更に要の表情が翳った。

「それ、なんだ。仲間って言うのがどうしても…」

「？ それはどういふことですか？」

「正直、オレにもわかんねんだ。悪い」

ゴメンな、そう言つと要は小さくそつぽを向いた。

すると、ふと骸が立ち上がった。

「要、僕と契約してくれませんか？」

「契約？」

「そうです。もしもの時君の体に移ることができるように」

要は立っている骸を見上げる形で怪訝そうな目で見た。

「もしもの時ってどんなときだよ」

「ボンゴレがここに来たときです」

「……好きにしろ、と言いたいところだが、契約方法にもよるな」

「簡単な話です」

骸はどこからか、先が三つに分かれた槍　三叉槍を取り出した。

「これであなたに傷を付けるだけです」

それを見て要は少しうーんと考えた。

そして、グツと親指を立てた。

「よし、その契約引き受ける」

「引き受けてくれるのは嬉しいのですが、何故そんなに乗気なの
でしょうか…？」

何故か若干笑顔で答えた要に引いた骸だった。

ふう、と小さく溜息をつく。

「それでは」

要は目を閉じた。

そして骸は、三叉槍を要の体にトン…と突き刺した。

一瞬の痛みに顔を歪める。

「痛いですか？」

「ちょっとな…」

「もう終わりましたから安心してください」

そっと目を開ける。

立った今刺されたところは、傷は完全にふさがっていた。

「スゲエな。傷が……」

「クフフフ。さて、もし何もすることがなければ自由にしているも
らって構いませんよ。M・Mも倒されてしまったようですしね」

言われてイヤフォンの音を注意深く聞くと、確かに倒された様子が
あった。

気付けば、メンバーの一人が足りない。

鳥が廻りに飛んでいたおっさん。

「バーズなら、M・Mに変わってボンゴレの元へ行きましたよ」

「そうか。んじゃ、お言葉に甘えて少しふらついてるぜ」

「そうしてください。但し、ボンゴレにあなたが僕たちの仲間だと
知られないようにしてください」

意外な言葉に耳を疑う。

「知られないように……って、何でだ？」

「念のため、ですよ」

骸はクフフと笑い、要はクスリと笑った。

それじゃあ、と言って要は部屋を出た。

38、 フィリミオ

骸のトコから一時的に立ち去ったオレは、森の中を歩いていた。

ふと、オレは銀からもらったブレスレットを見た。

沢田達ともし出会ってしまったたら、これを使ってどうにかできないだろうか…。

『できるぜ』

「のわっ!?!」

どこからか聞こえてきた銀の声。

「てめっどこにいやる!つか人の心読んでんじゃねえよ!」

叫ぶと、目の間に白い霧が現れた。

「心読んでねえよ。お前の考えてることが駄々漏れなんだよ」

「てめえ、覚えてるよ」

「わっわっ！待て！とにかく話を聞けッ！」

約一分間、黒曜ランドの森に断末魔が響き渡った。

「んで？話して？」

「そのブレスレットは何でもできるって言ったろ」

「は？」

「だから

」

銀がいなくなり、オレはまた一人になった。

目を瞑って気を集中させた。

ブレスに手を置く。

パサ、と音がして、頭に重みを感じた。

目を開けると普段見ることのできないものがあった。

オレの肘辺りまでに伸びたエメラルドグリーンの髪。

「…………できた」

まさか本当にできるとは…………。

これでいつ沢田達と会っても大丈夫

ガサガサ

「フウ太」

沢田あ！？

何でここで会ったんだよ……！

「あ……あの、誰ですか……？」

「えっ、えくつとオ……あ、“私”は……」

本名は言えねえ……！

やべえ！なんて名乗れば……

そ、そっだ！

「私はフィリミオ」

39、 女っばく喋んのって疲れるなbV要

ピピピピンチ！

現在大ピンチ！

「あ、あの…フィリミオ…さん？」

「うえっ！？はい！なんでしょう！？」

「フィリミオさんって並中の人ですか？」

「へ？」

沢田に言われて自分の格好を見る。

しまった！並中の制服じゃんかよ！

どーするオレ！

はい、並中生です。

いいえ、黒曜生です。

知り合いに借りたものです。

……あ、これでいいじゃん。

「いえ、これは知り合いに借りたんです」

「あ、そうなんですか」

一難去った。

「とっくに、ここは何してるんですか？」

また一難。

散歩です。

知り合いがいます。

なんとなく。

アンタには関係ないです。

「……散歩？」

「何で語尾疑問系？」

「……気にしたら負けですね」

完全にバカ発言だった。

「そーゆーアంతາここで何してるんですか？」

「えっ！えーっと…そのお」

「言えないんですか？何かやましいことでも？」

「いやっそーゆー訳じゃ…」

「それじゃあ何で答えてくれないんですか？私には質問いておいて」

必殺質問返し。

別に必殺というほどでもないけど。

「ここにオレの仲間を傷つける人がいるんです。それと、囚われてる人質を助けに…」

骸を倒しに来たってことか。

って、そんな事最初から知ってるじゃんか。

「あっ！」

「!?!」

「雲雀さん……あ、えーっと、黒髪の学ランを来た並中生を知りませんか!?!」

そー言えば恭も捕まってるんだっけ。

骸に居場所吐かせとけばよかったかな？

ま、それは後でも良いか。

「残念だけど知りません。ここはどこかにいることは確かでしょうけど」

「そう、ですか。それじゃあ、オレ、待ってる人がいるんで失礼します」

「私もこれで」

方向転換をして沢田を見て、自分も踵を返して立ち去ろうとする。

「ただし、誰かを助けたいのならくれぐれも死なないように頑張りなさい」

このつぶやきは、沢田は聞き取れたのだろうか。

「ふう、敷地が広くて迷うっての」

とりあえず敷地をぐるりとまわって、あの部屋に戻ってきた。

「おや、あなたは誰ですか？」

まあ、変装中だからこのリアクションは仕方ないわけで。

一応骸にもフィリミオを知っていらわないとな、的な考えでそのまま戻ってきていた。

「私はフィリミオです なんつって」

「フィリミオ……。なるほど、要ですか」

「あり？そんなあっさりされた？」

「恐らく“フィリミオ”とは“フリマイオ”を崩した名前。そして“フリマイオ”とはイタリア語で“霜月”を意味する。つまりは要というわけだ」

ほー、ナツポーのくせに頭の回転は速いんだなあ。

ま、それをとっさに思いついたオレもすごいけどな

「しかし、フリマイオをもじったとして、君のその格好には合わないのでは？」

「？　どーしてだ？」

「イタリア語は男性名と女性名が存在していることは知っていますか？」

「もちろんだけど」

「フリマイオは男性名ですが」

「ハア、分かってないなあ骸君。」

「オレが自ら女子の名前をつけるとでも思っつか？」

「つーかそもそも、“霜月”で女性名なんてねーし。」

「「どうでもいいだろ。それに、フリマイオじゃなくてフィリミオだしさ。それと、フィリミオでいる時は“私”だから、その辺よろしく頼むよ」

「分かりました」

「しかし……女っぽく喋るのって疲れるな」

「あなたも女性なのでから自覚を持つてはどつですか？」

「断る。オレはオレだ。他人に生き方をとやかく言われる筋合いはない」

「ええそつでしょうね。僕もいやですから」

「……じゃあ言つなよ」

「こいつ、考えてることわかんねーよな……」。

「そついえば、ランチアがやられたよつですよ」

「ランチアって誰だっけ？」

「顔にキズのある男です」

「ああ。そっか、やられたんだ」

確かM・Mはとっくにやられてて、バースも途中で気絶してんの見かけたし、そんでランチアがやられたとなると、

「もうすぐ彼らはここに来る。どうしますか要。いや、フィリミオ」

「そうだね。部屋の隅っここで気配を消して観戦でもしてるよ」

「ほう。しかし、契約がある限り君も僕の駒であることをお忘れなく」

「忘れないって」

そうだった瞬間だった。

扉が鈍い音を立ててゆっくりと開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7499v/>

家庭教師ヒットマンREBORN！

Let`s 傍観者！

2012年1月4日04時47分発行